

# 地域と農業

会報

第 48 号

Jun. 2003

*Winter*

特集

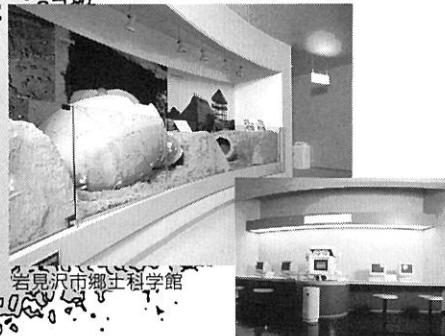
- 1、新規就農の現状と課題
- 2、新規就農を果たして



霧多布渓原センター



函館市北方民族資料館



岩見沢市郷土科学館

北の大地で芽をだし20年、  
今では大地にしつかり根をはり  
大きく広がった幹をもつ企業へと育ちました。  
北海道で生まれ、北海道で育った私たち、  
これからも北海道の歴史と人と未来を見つめつづける  
企業でありたいと考えます。

## 歴史と人と未来を結んで

### おもな業務内容

- 博物館・資料館など展示施設の設計・施工
- パンフレット・カタログなど印刷物の企画・制作
- 映像やコンピュータ装置による観光案内施設
- 看板・標示板などのサイン計画

株式会社 現代ビューロー<sup>gb</sup>  
GENDAI BUREAU CO.,LTD.

〒060 札幌市中央区北2条西3丁目 札幌第1ビル7F  
TEL 011-231-6049 FAX 011-222-6149

# 地域と農業

Vol.48

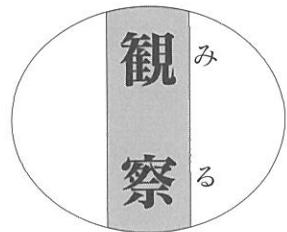
表紙写真：札幌市羊ヶ丘

—— 目 次 ——

提供：山田 精一



- 
- 2 **み  
観 察** 忍び寄る基盤崩壊の危機  
所長 七戸 長生
- 6 特 集 新規就農の現状と課題  
社団法人北海道農業担い手育成センター
- 13 新規就農を果たして  
蘭越町 農業 及川 肇  
蘭越町 農業 若山 英俊
- 28 ときの話題 あなたはスロー派、それともファスト派?  
禿老児
- 30 Essay 「北海道大好きな旅」その4－  
食農わくわくねっとわーく北海道事務局 長尾 道子
- 34 連載 No.31 あのマチこのムラ地域おこし活躍中  
旭川市 旭正支所の事例  
専任研究員 井上 誠司
- 41 特別寄稿 カレーを巡る感情的断章  
碓田 素州
- 47 揭示板・DATA FILE
-



# 忍び寄る基盤崩壊の危機

―― その防止対策はあるか――

(社) 北海道地域農業研究所 所長 七戸 長生

過ぎてみると昨年は、誠に多事多難な一年であった。同時多発テロに引き続くアフガニスタンでの戦争を始めとして、BSSEの問題、大手食品企業の不祥事件、北方領土に関わるムネオ問題、北朝鮮の拉致問題、等々、いずれも国際的な拡がりを持つと同時に、簡単に解決される見通しもつかないため、もう聞くのも嫌だと言いたくなれるような暗い話題が入れ替わり立ち代り登場して、まるで悪夢のようなされたような気持ちを味わった一年であった。

しかし、恐ろしいのは、こうじつた世間の沈黙したムードに押し流されて、政治的な無関心に陥つたり、肝腎の重要な長期的動向や趨勢をつい見落しがちになることである。それは例えば、昭和初期の世界的な大不況の混沌と虚脱ムードの中から、名目各様のファンズム・軍国主義がアツという間に台頭し、第一次大戦へとつながつ

ていった史実からも、大いに警戒しなければならない」とである。それは僅か数十年間の、経済的・政治的な混迷と虚脱を母胎にしていたと言える。

したがつて、私達に直接関係しているばかりでなく、国民生活全体からみても決してゆるがせにできない農業分野についての、重要な長期的動向に対する問題関心も、絶えず高めておく必要がある。



そこで、ひと改めて昨年度の農業白書には、そのような長期的な動向について、どのような記述があつたかを確かめてみた。その結果、このような重大な指摘や警告が行われていたのに、前述のよう

なものの錯綜した「コースの陰に埋れて、やゝせり論議されたり、注目されたりしなかつた問題点がいくつかあることに気付いた。ちなみに、その論点を列挙してみよう。

◆ ◆ ◆

専ほど、「農産物価格変動による影響を受けやすい」(白書一三九頁)。これがいかに深刻であるかは後述す。

①かつては六〇〇万石に達していたわが国の耕地面積は、昭和三十六年の六〇八・六万石をピークにして年々減少に次ぐ減少を続けているが、その原因は「耕作放棄を中心に減少している」(白書一五〇頁)。平成十二年には四七九万石にまで減少してしまった。

②バブル崩壊以降の経済不況の中で、農産物価格の低迷が著しいが、農産物の価格と生産資材の価格との相対的な関係を示す「農業の交易条件は悪化し、前年よりも五・一ポイント低下した」(白書一六一頁)。しかし正確に言えは「白書参考統計表」に明らかのように、平成八年以来一貫して悪化の傾向を続けて、平成七年の一〇〇がハ五・ハになつてゐる。

③農村の生産や生活にかかわる共同活動の活性化が注目されていふが、「混住化や過疎化により農村の集落機能の低下が懸念される地域がみられる」(白書一四九頁)。とりわけ都市近郊地帯や中山間地域での集落活動の取り組みの重要性が指摘されてゐる。

④農業を取り巻く経済環境が益々厳しくなる中で、価格変動などのリスクが増大しているが、「農業所得への依存度が高い大規模経

とじみで、読者の大半は北海道の農業地域の農業経営者や関係機関の人達だと思うのだが、皆さん、この四つの論点についてどのように考えておられるだろうか。

多くの北海道の関係者の論調から推測すると、全国の農業についての、さまざまな問題点の指摘は、専業農家が大多数を占めている北海道の農業にはあまり当たはまらないことが多いという捉え方が圧倒的であるように思われる。つまり、府県の農業は零細な耕作を行う兼業農家(それも農外からの所得が大半を占めるような、いわば片手間の農業者)を中心としているのに對して、北海道の大部分の地域は大規模な耕作を行う専業農家(もっぱら農業からの所得で生活を賄つてゐる)によって占められている。したがつて農業に生活を賄つてゐるため、農業生産を高め、農産物を有利に販売するにとて、日夜専念しておられるところの意味でも「専業農業」であるといつて負心を持つてゐる。

そして、この専業農業地域としてのプライドから、零細な府県農業を中心とする全国の動向は、北海道にはあまり当たはまらない、北海道にはその独自性を支える基盤がある、というように考えるのが通例のように思われる。私も、このような北海道の農業の特色的捉え方には同調するのであるが、そのことをあまりに強調しきれないとには少なからぬ疑問を抱いてゐる。例えば、上述

の白書の四つの問題点の指摘は、北海道に於ては全く無関係の動向なのか、それとも矢張り北海道でも共通の、大いに憂慮しなければならぬ緊急の課題なのか、という点については、いかに北海道びいきの立場に立つてはよしとも、冷静に確認しておく必要があると想ふ。

では、先ほどの白書の指摘の順に従つて、北海道の状況をみていこう。

①北海道の耕地面積は昭和三十五年には約九六万㌶であつたが、全国の耕地が減少に転じた昭和三十六年以降も牧草地を中心にして拡張を続けて、平成二年には一一〇・九万㌶のピークに達した。それ以降は、年々四～五〇〇〇㌶ずつ減少してきている。いまや、昭和六十年頃の水準にまで縮小しているのである。そしてその原因は、農外転用や植林転用の他、農耕不適地の耕作放棄を含む「人為かい廃」が主流である。

②北海道の農業交易条件指数は、平成十年が九三・九、十一年が九三・五、十二年が九〇・〇で、全国平均よりも極めて僅かながら高いとみられるが、年を追つて低下傾向を辿つており、情勢が好転しているわけでは決してない。

③北海道の農業集落は、もともと開拓以来の特色として散居集落が多く、農家を中心とする比較的小ない戸数規模（三〇～五〇

戸）の集落が多かつたが、農家戸数の減少を背景にして、いくつかの集落を統合した比較的、戸数の多い規模（一〇〇～一五〇戸）へと推移しており、その過程で農家割合が大きく低下しているところが少なくない。また、農家戸数の減少によつて、従来の地域的な連帯活動を持続するのが困難になつてゐるところもある。

④北海道の大規模専業農家層が、農畜産物の価格低下によつていかに深刻な打撃をうけているかは、白書のデータ（全国農業共済協会の全国的なアンケート）からも明らかで、農業収入が五〇〇万円未満の農家では、収入の一割以上が減収となつても、経営が何とかなるというものが五三・七%もあるのに対しても、農業収入が二、〇〇〇万円以上の大規模農家では、収入の一割以上が減収となつたら、経営困難に陥ると答えたものが七一・二%に達している。このことは、経営が大きくなるほど経費の相対的な比率が高まり、所得率が低下していく傾向がある」とし符号する。

したがつて、これらの四点については、北海道は全国とほぼ共通の問題状況下にあるとみられる。むしろ、大規模専業農家地帯であるが故に、より深刻化しそうともみられる点も少くない。



といひで、以上のように昨年の農業白書で指摘された四つの問題

点をめぐつて、これが北海道農業にとっても重要な論点である」とを確かめてきたが、ここで強調したいといはれらの問題点は互に密接に関連し合つていて、時間の経過と共に相乘的に作用し合つて益々悪化し、つゝには事態を救いようのない破局へと導く可能性が極めて大きいところである。

その関連の道筋は決して単純一様ではないが、例えば、②の農業の交易条件の悪化が、①の不作付地・耕作放棄地の発生につながり、仮にこの遊休農地を借りたり、買つたりして耕作しようとする農家がいたとしても、③のような集落機能の低下によつて、情報の流れが阻害されたり、互いの利害が適切に調整されなくなつたりしていふとしたら、①の状態を一段と悪化させる方向に動くであつた。さういふところの困難を乗り越えて、意欲的な農家が果敢に農地の借入や購入によつて規模拡大を進めることが出来たとしても、②の交易条件の悪化という情勢の下では、経営能率の向上が予定通りに実現されにくく、結果的には④のような大規模経営不安定の事態に陥りかねない。

こういつた情勢を反映して、これ以上の農地の拡大に一の足を踏む傾向が拡がつてしまつて、①のような耕作放棄が、農耕不適地ばかりでなく、優良農地と曰われてゐるところまで蔓延していくおそれが濃厚である。

つまり、このまま放置しておけば、いずれそのうちに何とか回

復していくだらう、といひような楽観的な事態では全くない。この意味で、いまのところは、それほど大きな比率を占める動きでもないし、すぐに大問題になるわけでもないとタカをくくつてしまつて過言ではない。

とりわけ北海道の場合は、農地価格の低落傾向が、昭和六十年以降、一貫して続いている。その結果、平成十一年の中田自作地売買価格は、ピークの六六%，中畠自作地の場合は六九%に低下している。もちろん、この地価水準がバブルの頃のような高値に戻ることを期待している人はあるまい。前述の白書の②や④の指摘から言えば、まだまだ低下するのかもしれないが、農地は生産の基盤であると同時に、農家の資産であり、サラリーマンの退職金にひけをとりぬ経済価値を持つことが望ましいといつて面もある。

この一点をとつてみても、農地をめぐる北海道の趨勢をこのまま放置しておいたら、恐らく確実に農業基盤は崩壊するであつた。ではどうしたらよいか。いまは、この問題に最も深刻に直面している現地の実情に学び、それに沿つて未然に講ずべき手だとは何か、長期に亘つて対応すべき課題などに对策はどういうものか、を緊急に検討する必要があると想える。



実は、来る一四二三日、以上のよつたな趣旨をふまえて、研究所恒例の研修会を開催するといつておこなうので、ご関心をお持ちのむきはお誘い合わせの上、ぜひ参加下わざ。

## 新規就農の現状と課題

社団法人 北海道農業担い手育成センター

### はじめに

農に魅せられた若者が新しい感覚で農業を始めています。そのことが地域の農業者や後継者にも良い刺激を与えています。

こうした人たちを農業の担い手として確保するため、平成七年に国の法律制定を受けて本道においても、社団法人として北海道農業担い手育成センター（以下道担い手センター）が設立されました。また、地域では市町村、農委、農協のいずれかに窓口をおく地域担い手育成センター（以下地域センター）が推進機関の活動を行っています。道担い手センターでは専任職員が相談に当たり、農業を始めたい人には農業研修、短期間の農作業体験を希望する人には農業体験実習を地域センターと連携して、非農家出身者の受け入れを行っています。

地域の活性化に向けて、農業を目指す人たちが何を考えているのか、また、地域で何が問題になつてゐるのか、よそ者ではなく仲間として互

いに向き合つたために、いろいろな観点から考えてみたいと思います。

### 就農相談で優れた人材を発掘

#### 一、農業を目指す人たちのタイプ

農業を始めたないと考える人たちが増加しています。農業に対する価値観の変化や社会情勢の変化などから、農業や農村に対する新たな考え方を持った人たちが農業や農村に参入しようとしています。これらの人たちの特徴や傾向についてふれてみたいと思います。

一つには、人生観や農業に対する価値観から農業を選択するタイプです。

#### ① 本当に農業が好きな人

相談者の言葉に「高校生の頃から農業が好きでやってみたかった。でも農家ではない者が農業はできないと思い込んでいました」と。

## 社団法人 北海道農業担い手育成センター

札幌市中央区北1条西7丁目1番地（プレスト1・7ビル3階）

TEL 011-271-2255 FAX 011-271-2266

ホームページアドレス：<http://www.ninaite.or.jp/>

### 首都圏センター

東京都千代田区平河町2丁目6番3号（都道府県会館15階）

北海道I J U（移住）情報センター内（就農コーディネーター）

TEL・FAX 03-5212-2233

### 関西センター

大阪市北区梅田1丁目3番1-900（大阪駅前ビル9階）

北海道大阪事務所内（就農コーディネーター）

TEL・FAX 06-6344-2717

相談先も無かつたようですが、このように農業が好きで生涯の仕事として農業を選択する人です。

#### ② 食の安全性を追求する人

輸入ほうれんそうの残留農薬問題に象徴されるように、食の安全性に対する関心が一段と高まっています。自分の手で安全な野菜を生産し提供したい、消費者に顔の見える農業をしたいとする人です。

#### ③ 規模は小さくても経営者になりたいとする人

人に使われるのではなく、意思決定の主体者になりたい、農業をやるためにどんな苦労があつても後戻りはしないとする人たちです。

#### ④ 脱都会者で北海道の大地で子供をのびのび育てたいとする人

家族みんなで汗を流す農業、家族と一緒に食事ができる、自然豊かな良い環境で子供の教育をしたい等ライフスタイルを考えての人たちです。

二つには、社会情勢の変化に対応せざるを得ない人たちです。

#### ① 終身雇用制度・年功序列体系の崩壊

会社が一生面倒見てくれる時代は、終焉したと言われています。いつ自分の身に迫るか雇用不安を持つサラリーマンが増えています。国内企業の海外進出により産業・経済のグローバル化が進み、産業の空洞化が進んでいます。デフレ経済に関係が深いといわれるアジア諸国等への企業進出は、急テンポな技術移転と製品輸入で仕事の先行き不安を一層増大させています。

人材が流動化している中で、多様な優れた人材を確保するチャンスが到来しているとの見方もあります。

#### ② 長引く不況で会社等を解雇された人

九月の全国の有効求人倍率は、前年同月を〇・〇一〔ポイント下回る〇・五五倍と悪化しています。求人者が減少し就職が厳しい状況にあります。これも反映してか、この際、農業でもやつてみようかとする人たちです。

三つには、農業に対する新たな考え方を持つた人たちです。

#### ① 消費者（生活者）参加型の農業を目指す人

大地で汗を流し生産の喜びを消費者と共有したい、安全な食べ物を自分たちの手でつくりたいと考へている人たちです。産消提携としてのトラスト活動の担い手です。

#### ② 都市住民と農村の交流拠点としてファームイン等を考える人

グリーンツーリズムの潮流に乗り、新鮮で安全な食材を提供するファームイン、ファームレストラン等の取り組みを考えている人たちです。過疎化が進行し定住人口が減少する中、交流人口が増加することは、地域経済の活性化に良い影響を与えるものと期待されています。

#### ③ 農業の教育的な機能に着目している人

生産活動や農村生活を通して都会の子供たちを山村留学生として受け入れを考えている人たちです。環境の良い農村で情緒豊かな人間を育てたい、また、体験ファーム、不登校児童たちの受け入れ等に取り組みたいとするものです。

四つには、農村と都市生活の両立を考える人たちです。

経験豊富な熟年者仲間で農業をしたいとする人たちがいます。また、定年を迎えた今、子育てや住宅ローンの返済もすでに終わり、充実した生活を夏は北海道で各人が特技を結集して農業、冬は都会

で生活をするといったことを真剣に考え、研究会を持ち知恵を出し合っているグループの人もいます。

このほか、ビジネスチャンスを模索している企業からの相談もあります。

食と農の再生プランを契機に、道担当手センターへも建設業、製造業や医療関係者が農業への参入、生産法人の資本参加について、企業の責任ある人が相談に訪れています。今、農業のあり方について地域の主体的な方向づけが求められていると思います。

#### 二、あなたの地域に農業を目指す人がいます

相談は全国各地から寄せられています。地域毎にどのような職業の人が農業に関心を持っているか平成十三年度の人数で見てみたいと思います（表1参照）。

農業研修の相談者数はハ九四人です。職業は会社員がどの地域で多く半数近くを占めています。次いで失業中の人々や主婦等を含むその他となっています。地域別の人数の多い順は北海道、関東、近畿地方で約八割となっています。道内の相談者の中で、ハローワークや就職情報誌等を通して大規模農家で働いている人（農業従事者）からの相談も増加していますので、道内の各地域の足元に農業を目指す人が居ることを知ってほしいと思います。

体験実習は九〇九人から相談を受けています。都会を中心には会社員、学生、その他が多くなっています。

道担当手センターを経由して地域センターが研修等を受入れる人數は、近年三〇〇人前後となっています（図1参照）。農業研修を希

表1 相談者の地域と職業等（平成13年度）

(単位：人)

| 地域  | 区分 | 職業等 |     |     |     |       |       |     | 総計  |
|-----|----|-----|-----|-----|-----|-------|-------|-----|-----|
|     |    | 会社員 | 学生  | 公務員 | 自営業 | 農業従事者 | フリーター | その他 |     |
| 北海道 | 研修 | 129 | 22  | 18  | 20  | 27    | 23    | 63  | 303 |
|     | 体験 | 40  | 28  | 5   | 5   | 6     | 21    | 35  | 140 |
| 東 北 | 研修 | 14  | 4   | 1   | 1   |       | 1     | 9   | 30  |
|     | 体験 | 6   | 8   | 1   | 1   |       | 3     | 8   | 27  |
| 関 東 | 研修 | 132 | 17  | 9   | 17  | 4     | 31    | 42  | 251 |
|     | 体験 | 89  | 72  | 5   | 3   | 2     | 55    | 49  | 275 |
| 中 部 | 研修 | 43  | 8   | 7   | 9   | 4     | 6     | 16  | 93  |
|     | 体験 | 37  | 23  | 8   | 7   | 3     | 17    | 29  | 124 |
| 近 畿 | 研修 | 56  | 24  | 3   | 11  | 7     | 11    | 36  | 148 |
|     | 体験 | 74  | 57  | 7   | 7   | 2     | 34    | 56  | 237 |
| 中 国 | 研修 | 8   | 4   |     | 1   | 2     | 1     | 2   | 18  |
|     | 体験 | 4   | 28  | 2   | 1   | 2     | 1     | 4   | 42  |
| 四 国 | 研修 | 8   |     |     | 3   | 1     |       |     | 12  |
|     | 体験 | 1   | 3   | 1   |     |       | 2     | 1   | 8   |
| 九 州 | 研修 | 15  | 5   | 3   |     | 4     | 1     | 6   | 34  |
|     | 体験 | 10  | 24  | 3   |     | 2     | 2     | 8   | 49  |
| 国 外 | 研修 |     |     |     | 1   |       |       |     | 1   |
|     | 体験 | 1   | 2   |     |     |       |       | 1   | 4   |
| 不 明 | 研修 | 1   |     |     |     | 1     |       | 2   | 4   |
|     | 体験 | 2   |     |     |     |       |       | 1   | 3   |
| 総 計 | 研修 | 406 | 84  | 41  | 63  | 50    | 74    | 176 | 894 |
|     | 体験 | 264 | 245 | 32  | 24  | 17    | 135   | 192 | 909 |

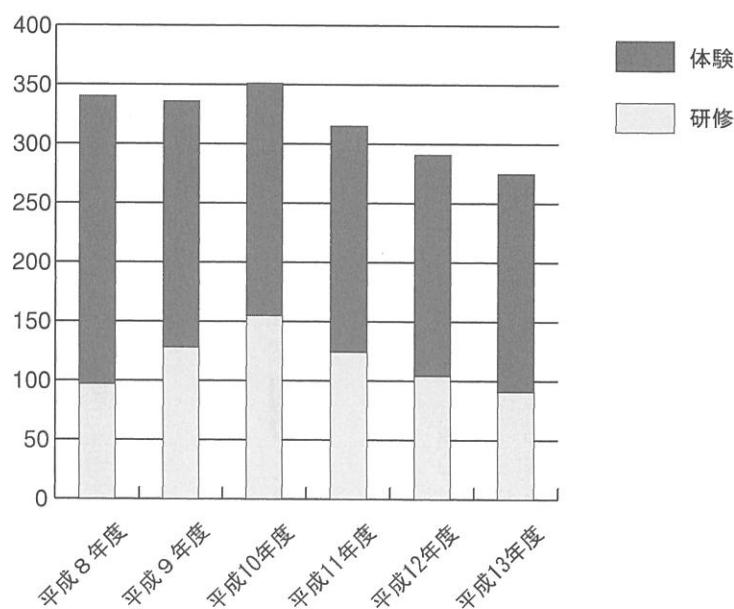


図1 農業研修と体験実習者数の推移

望される方でも農業経験がない場合、相談の過程で体験実習を勧めています。そのため、体験実習の割合が増加しています。

### 三、多様な相談方法で人材を確保

#### ① 就農相談窓口

相談者に対して適切な対応ができるように、専任の就農コーディネーターが七名配置されています。利用者の利便性に配慮し平成八年から首都圏センター、平成九年から関西センターを開設し、相談活動の充実を図っています。

相談方法は、面談、電話、啓発資料に添えた返信はがき、ホームページを通じたメール相談等で日常対応しています。内容は農業以外に移住、教育等の相談まで舞い込んでいます。

#### ② 大都市中心に相談会の開催

北海道で農業を始めたい人や体験をしてみたい人は、東京、大阪とその周辺都市に多数潜在していると思われます。そのきっかけづくりに新規就農、リターン、体験実習等の相談会やセミナーを開催しています。東京会場には地域センターの参加を募り、毎年一〇数カ市町村が参加し、私たちと一緒にブースを持ち、熱心に人材の発掘に当たっています。本年度は一九四人の相談者が来訪しました。

この他にも、全国農業会議所が主催する新規就農セミナー・相談会・農業生産法人会社合同説明会「ニューフアーマーズフェア」が本年は全国六か所で開催されました。十一月下旬には札幌でも開催され、道内、東北等から三〇〇人の相談者が訪れました。

また、道主催で全職種を含めた「リーターン北海道フェア」が東京で十一月下旬に開催され、大阪では在阪道府県協議会主催の相談会が十五年二月初旬に開催される予定となっています。

#### ③ 農業視察・体験ツアーの実施

北海道農業の実態や農村生活を実体験して、一人でも優秀な人材を確保しようと企画し、地域センターの協力を得て実施しています。本年度は津別町で六名の参加を得て実施し、短い期間の中でも本格的な農業体験が行われました。

## 求められる地域の受け入れ体制づくり

### 一、知つてほしい受け入れの仕組み

多様な相談方法を経てきた相談者は、就農コーディネーターと納得するまで情報交換をします。特に、農業研修の場合は現地訪問を重視し勧めています。その地域の生活や農業事情の把握、先輩新規就農者や就農アドバイザー（一一人委嘱）の農場訪問、関係者と面談をするようにしています。この機会は、本人の意志固めと地域センターが受け入れる人材として適当かどうかの判断に欠かせません。本人が十分納得した上で、研修申込書を出してもらいます。

地域センターでは市町村、農業委員会、農協の機関が協議し、申請者の意向をふまえながら、指導農家等に受け入れを依頼します。こうして受け入れ農家が決まるときセンターは研修申込者に通

知ることも、受入れをする地域センター（窓口は役場農政係等）、

受入れ農家や普及センターへ指導依頼の手続きをします。

平成十三年度の受入れ市町村数は、研修が四六、体験が七一となっています。

ここで大切なことは、地域での受入れ体制です。今でも勘違いをして、従業員扱いで受入れを希望するケースが散見されます。

こりした事例は、研修や体験実習の制度を十分理解していないか、あるいは役場の担当者が理解していても農協の担当者や受入れ農家の認識が不十分な場合もありますので、地元関係者の十分な理解と連携のもと、地域センターの総合的な機能強化が求められています。

## 二、指導農家での研修や体験の方法

現在、地域センターから指導農家として推薦されている個人農家や生産法人数は、六一〇となっています。受入れ農家は指導農業士やこれに準ずる人です。

研修や体験実習を通して、農業や農村生活を実践的に学びます。

### ① 作物の栽培や家畜の飼養管理を学ぶ

受入れ農家は、日常、実践的に農作業を通して基本技術の指導、作業のコツ等のワントップアドバイスや経営管理等を総合的に指導します。

### ② 農家生活の理解

経営者の理念、家族の和、家族の家事作業と農作業の役割分担、更にはゆとりある生活のため酪農ヘルパーや「ントラクター等の労

働支援システムの活用などを学ぶのです。

### ③ 地域社会への参加や経済の仕組みの理解

作団部会、研究会、交流会等へ積極的に参加し、人のつながりをつくることが大切です。また、農協、集出荷施設、市場等の農業生産・販売のシステムを日常的に理解を深めることも、就農に向けて極めて大切なことです。

## 三、地域全体で担い手を育てる

受入農家段階では指導が難しい理論や知識面の講義については、一部の市町村では役場や研修施設の会議室で普及員や獣医などが講師になり、ゼミナール方式の集合研修を行っています。また、支庁や普及センターが中心となり、広域的に実施されているケースもあり、地域の先進農家や新規参入の先輩農家の視察を行う場合も多いようです。

このような取り組みは、日頃限定されがちな研修者の人間関係が地域の関係機関や先輩農業者、さらには同じ境遇にある研修生同士に広がり、精神面も含めた支援が期待されることから、受入れ農家だけに指導を任せるのではなく、地域全体で担い手を育てるといった視点からの対応が望まれます。

## 四、受入れから就農への支援

一ヶ月以内の短期間の体験受入れは、一般的に食費は農家負担で手当や交通費の支給は一部地域を除きありません。一方、研修が長期に及ぶ場合は、安心して学び生活ができるよう、研修手当の支

給が必要です。この負担は研修者の労働対価の一部として受入れ農家が全面的に負担するというが多い実態にあります。また、道扱い手センターの負担を工夫している地域もあります。また、道扱い手センターの支援策を活用するなど、不足する部分を地域で負担しているところもあります。その他、傷害に対する備えも考慮しなければなりません。

ある期間研修して就農の見通しがつきますと、就農計画を作成し、計画が知事から認められますと認定就農者になります。これにより、就農支援資金（研修資金、準備資金、施設等資金）の借り受けも含め、研修から就農に至る支援の対象になることができます。

地域で取り組んでいる支援策は、道内100近くの自治体で策定されています。就農時や就農後の奨励金、地代やリース農場の賃貸料の助成、三～五年間にわたる固定資産税相当額の交付、農地、建物や機械等初期投資の助成、借入れ資金の利子助成、移住住宅の修繕費助成等多岐にわたっています。

地域では独自の財源を捻出したり、各種事業を活用して、ハード

面の研修施設や宿泊施設を設ける地域が増えつつありますが、農協が実施主体となって担い手対策を行っているのは、市町村との共同実施を含めても、道内では一〇農協に満たない状況です。

最近、農協から広域合併を控えているので新規就農者の受け入れができなくなつたと聞くこともあります。しかし一方では、農協による研修宿泊施設の整備、また、JA北海道中央会支所担当者会議での新規就農についての議論などの新しい動きもあり、地域に根ざした様々な取り組みを期待しているところです。

## 経営開始に向けての課題

道が調査した平成十三年の新規就農者数は、101人と前年に比べ三六人増加しました。就農の方法は耕種経営では借地が多く、酪農はリース農場制度や保有合理化事業等を活用し、初期投資を軽減しています。

一方で、地域により研修が終つても就農地が無いといつ事態が発生しています。見通しを持った研修者の受け入れが望まれます。

最近、経営形態を問わず五〇歳代半ば位の農家から直接電話で「經營を移譲したいので意欲ある人を紹介して欲しい」との問合せが道扱い手センターにきています。こうしたケースには、「継承まで研修期間と共同経営期間を持つような、新たな継承方式を開発する必要があります。シェアミルカー制度を参考にしたり、コントラクターを利用し、土地や建物は賃貸形態をとる方法も考えられます。

## おわりに

高齢や後継者不在農家が経営を閉じています。こうした状況に対し、農業者や関係機関が危機感を共有し、新たな人材を受入れる仕組みを整える必要があります。

そのためには、まずは受入れ体制の整備、そして受入れ後の研修体制の整備、さらには就農並びに「オローアップ体制の整備、この三つがセットになつて初めて、地域に根付く人材を確保できると思います。

# 私たちの新規就農

磯谷郡 蘭越町 及川 肇

## はじめに

私たち家族五人は、二〇〇一年、二十一世紀の始まりとともに就農をしました。私たちの就農は、自分たちなりの苦労はありましたが、さまざまな人達にお世話になり、土地・風土・地域・自然など私たちの力ではどうにもできない条件にさえも恵まれた中での就農であったと思います。そんな恵まれた条件に、言い表しつづけることができない感謝の気持ちをこめて、私たちの新規就農までの顛末を紹介したいと思います。

## 就農の動機

私たち夫婦は、ともに北海道出身（夫・若見沢市、妻・札幌市）で同じ農業系の大学を卒業し、就職・結婚をしましたが、学生時代には世界と競争をしていかなければならなくなつた農業に展望が見えず、といつよりは世に育つ大学生と同じく、大学生活を親

のすねをかじりながら謡歌し、農業経営や農業情勢については真剣に取り組む姿勢はあまりなく、ただ、学生の本業について問い合わせられる時のために、かろうじて先生の話を頭の隅に置いていた程度ではなかつたかとおもいます。

その後札幌で就職し、妻は農業試験場で乳牛の世話をする仕事に、夫は市町村の依頼を受けて地域の活性化を考えるコンサルティング会社に就職しました。妻の職場は、常に農業や家畜に接し将来実用化されるであろう研究や情報が飛び交う職場であり、夫の職場は主に町村に出向き道内の農山漁村の人達と将来の方向について話し合い、報告書を作成するような職場になりました。

そんなサラリーマン時代の中で、昭和六十三年に結婚し、妻は職場を退職し、一女・一男をもうけ、マンション暮らしをしながら趣味として裏の空き地を借りて家庭菜園を作り、夏・秋には家族四人でささやかな収穫の喜びを味わつたものでした。同じマン

## 及川 肇（おいかわ はじめ）さん



- 1961年 岩見沢生まれ  
1985年 めん羊管理技術習得のためカナダ・アルバ  
ーク州にて1年間実習  
1988年 帯広畜産大学卒業  
1988年 (限) ライヴ環境計画入社  
1998年 (限) ライヴ環境計画退社  
1998年 蘭越町富岡に転居  
1999年 新規就農研修開始  
現在に至る

ショノに暮らすご近所の方たちともそれぞれの菜園について情報交換したり、子供たちが一緒になって土いじりをしている姿は、都会の中での一種の贅沢にも思えたものでした。一時は、こんな贅沢な気分になれる土いじりの魅力にひかれ、後志管内の蘭越町という町の農業委員会を、「農業をやってみたいのですが」と訪ねたことがあります。答えは「いくらの財産を持って農業をはじめようというんだい?」と聞かれ、「そんなにお金がかかるものなのですか?」と驚いてしまう始末。趣味の延長に思いついた結果は、あっけなくボツになってしましました。学生時代からサラリーマン時代を通して、農業や農村と接する環境にいたつもりでしたが、今考えると、農業や農村に関する情報と付き合つていただけで、実際の農業と付き合っていたわけではなかつたようです。

しかし、平成七年に次女が誕生した時に、私たちの生活は小さな変化をもたらしました。次女は出生時に障害があり、その後、二年あまりにわたり、手術・入院の日々が続きました。幸い現代の高度な小児医療のおかげで、我が子は退院する事ができましたが、入院していた小児病院では、様々な障害を持つ子供たちがあまりにも多く入院しており、「なぜ、このような子供たちが生まれてくるのか?」という疑問を抱いたものでした。そのことを夫婦で話し合っているうちに、子供を生む私達の何かに原因があり、そのまた原因是、普段の食生活やストレス、生活リズムの不規則さにあるのでは?と思つようになりました。そこで、せめて自分

たちの食べるものは自分たちで作ることはできないものかと想え、たどり着いたのが「農業にチャレンジしてみよう」ということでした。

## 都会から農村へ

私たちは、「（じ）で農業をしようか？」という事については、あまり悩んだ記憶がありません。夫は以前、仕事を通じて蘭越町の富岡という集落で生き生きと農業を展開しているグループと出会い、それ以来、こんな農村で共に暮らしてみたいという強い願望がありました。会社を辞め、その二日後にそのグループのリーダーの方に相談に出かけました。その方は、「農業をやりたい」という相談に乗ってくれるつもりだったのですが、仕事をすでに辞めてきたという話を聞き、慌てて「農業をする」ための相談に変わってしまいました。

富岡で農業をするための家・土地・研修の方法・資金の調達・保証人・就農までの手続き・営農の方法・関連する人達への面会や紹介などなど、すべてのことについてじぶやな顔せずに相談に乗つてくれました。私達にとつてこのような人の出会いは、万に一つもないのではないかと、未だに感謝しております。いつも再び町の農業委員会へ相談に行つたわけですが、以前とは違ひ地元の人達の後ろ支えと趣味の延長とは違つた私たちの気持ちを汲んでいただき、少し強引ではありましたが、平成十年八月、なんとか蘭越町への移住が実現しました。

蘭越町に越してきた初めの年、私たちは、失業手当を生活費に当てながら、翌年の春から開始する研修の準備と、集落の人達や子供の通う学校の父母や子供たちとの「ミニケーション」に専念しました。その時は何も意識せずに、地元の人達との挨拶代わりにと、町のことや農業の話などいろいろな話を聞いたり、自己紹介をしたりしていましたが、このことが今の生活の上でとても役に立つてゐると実感しています。

私たちの住んでいる町は、六千人ほどの小さな町で、町民どうしは二、三人たどれば知り合いにぶつかるような関係にあります。そんな中で札幌から突然「農業」をやりにきた私たちは、地元の人達には、「知らない人」「見た事ない人」と思われていました。そんなことが、人と会い、話しているうちに「札幌から来た人」「富岡に住んでる及川さん」というように知つてもらえるようになりました。また、農業に関するあらゆることを教えてもらったり、農業に未熟な夫婦一人ではできない作業を手伝つてもらったり、足りない道具を貸してくれたりなど、「すまないなあ」と思ひながらも頼めるようになつたのも、この時期があつたからだと思います。

新規就農者が「農村で暮らす」「農業をやつしていく」ためには、自分たちが住んでいるという気持ちではなく、そこに住まわせてもらひ、その土地の環境の中で農業をやらせしもひつているといふぐらいの、謙虚な気持ちが一番大切であることなのかもれません。

## 研修そして就農へ

私たちは、道の就農支援資金を活用し、二年間の研修を行いました。研修は、移住の時からいろいろと相談に乗ってくれていた同じ地区に住む椿新二氏が引受農家となつて、野菜栽培を中心とした研修をする事としました。しかし、研修を行つた富岡地区は、稻作中心の地区であり、野菜の栽培は農家の家庭菜園以外はほとんど見られませんでした。引受農家の椿氏からは、「野菜栽培に使えそうな資材や基本的な栽培技術の提供、町内で野菜栽培を手がけている人の紹介などはしてあげるから、後は自分たちで情報を仕入れ、栽培し、販売してみなさい」といわれました。実際、この研修を終え就農した時にある程度の自立ができなければ、単なる技術研修に終わってしまいます。この研修内容には、抵抗はありませんでした。

研修では、約一・五㌶の土地を借り、ハウス三棟で果菜類、露地ではアスパラ・ジャガイモ・カボチャ・ズッキーニ・トウモロコシ・豆類などを作付し、トラクターなどの機械は稻作で共同利用しているものを利用料を払つて使わせてもらい、栽培技術は改良普及センターや近所の農家のおじいちゃんにことある毎に聞いてまわりました。販売は農産物をトラックで札幌に運び、知り合いの人達に等に買ってもらつ「訪問産直」、箱詰めして宅配便で配送する「宅配産直」、直接畑に来てもらつもぎ取つてももらつ「もぎとり産直」という形で行いました。また、これらの販路を確保す



宅配トマト・野菜  
宅配で配送している商品です



るためにそれぞれの収穫時期に合わせた農園の情報をかわら版にして、消費者の方に郵送したりもしました。私たちの農産物は現在でも、すべて無農薬・減化学肥料で栽培していますが、研修の一ヶ月の収穫は、作物の観察不足と管理の不足によりわざかなものとなってしまいました。続く二ヶ月の研修では、前年に発生しなかつた害虫の被害に合い収穫時期が遅れ

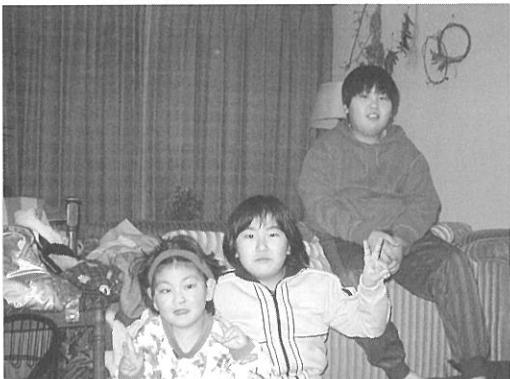
るためには、それなりの取扱いを心がけました。そこで、私たちの作つた農産物を提供することができました。農産物を販売してくれる人たちの中には小さな農園を応援してくれる人もてきて、販売先を紹介してくれたり、休みの日には手伝いに来てくれたり、自然農薬や害虫の天敵に関する情報を教えてくれる人や、実際にその資材を無償で送ってくれる人もおり、こんな人達にずいぶん元気付けられた研修期間だったと思います。

研修が終了し就農の準備に取りかかったわけですが、この時にも大変だったのが一〇年先までを見越した就農計画書の作成と二㌶以上の農地の確保でした。私たちの場合、計画書を作成する作業 자체は以前やっていた仕事と同じようなことでしたが、予測のつかない自然条件によるようなことではありませんでしたが、予測のつかない自然条件に左右される生産と自分たちの技術の熟度を考えながらどうのくらいのリスクを覚悟して計画していくべきかを悩みました。周囲の人の中には、「数字合せなのだだから」という人もおりましたが、もしそれがうまくいかないので、途中でリタイヤするようなことが起きれば、今までこの地で協力してくれた人達に大きな迷惑をかける事になる。

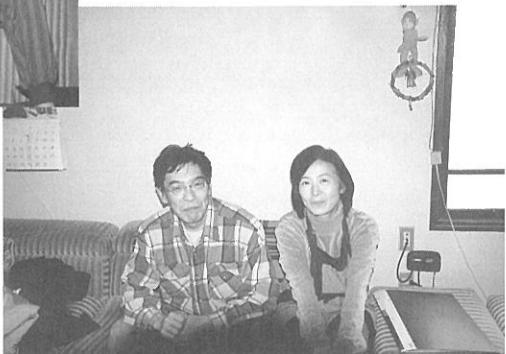
また、その計画が現実からかけ離れたものであれば、サラリーマン時代にやっていた仕事を否定することにもなる、といった変なプライドのような意識も働いていました。作成にあたっては、普及センター・農協・役場・農業委員会に相談に行き、きびしい判断を聞いてまわりました。



札幌から休日を利用して手伝いに  
きてくれた人たち



3人の子供



理解者であり良きパートナーの奥さんと

土地の確保については、二翁という中途半端な広さの土地を貸したり売ったりしてくれる人は少なかったのですが、幸い集落内で離農して貸し農地を持っている人が、一・三翁を賃貸し、一・二翁を売買してくれることになりました。売買してくれる土地の中には野菜の選果や保存場所に利用できる古い廃屋もあって、私達にとってはよい条件の土地を確保する事ができました。このようないきさつをたどり、平成十三年の四月に無事農業委員会の許可があり、就農することができました。

農園の名前も、消費者の方たちに郵送していた通信のタイトルがそのまま農園の名前として呼ばれるようになり、「Kitchen Garden」とすることになりました。これは野菜を貢げてくれる方たちから出た名前であり、私たちも農家の家庭菜園で作られているような野菜を直接家庭の台所へとつことから、とても気に入った農園名となりました。

## 今後のKitchen Garden

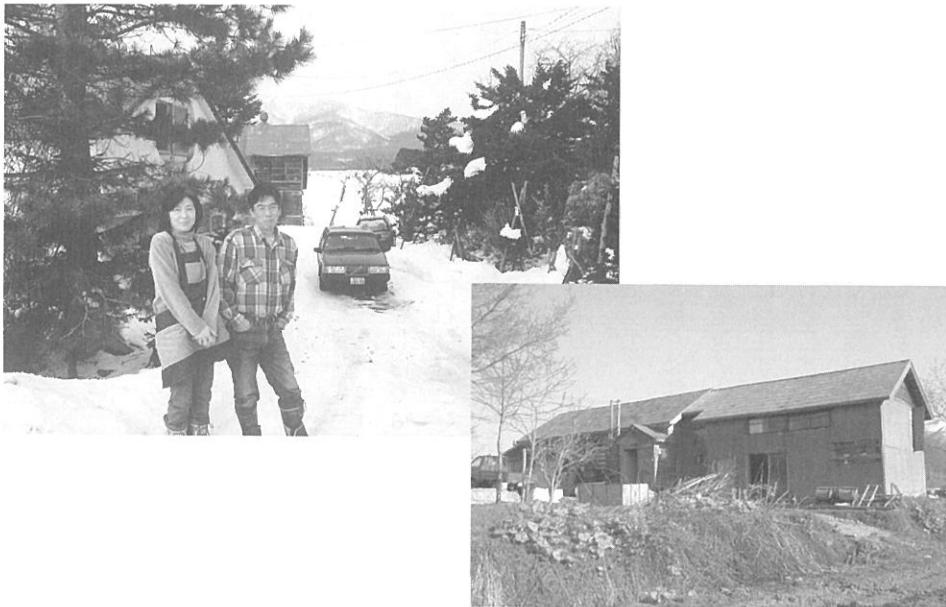
就農を決意してから五年目になった現在、訪問・宅配・もぎとりによる個人販売と少量の系統出荷による販売を行っていますが、完全に自立した農業経営とは言えるようなものには至っていません。しかし、個人販売の売上は年々拡大し一般家庭からの注文の他、洋食・和食の飲食店や料理教室の先生や生徒さんたち、地元のスーパーなどからの注文も増えており、農産物を使って料理するプロ、食べるプロ、商品として販売するプロからの直接の評価

を得られる事は、私たちの生産意欲を増大させる原動力になっています。

私たちのような個人販売が中心となつてゐる小規模な営農活動は、国民の食料自給を担うと言う意味では「農業といえるものではない」という人がいるかもしませんが、もともと資産・資金力・技術もないところから始めた私達にとつてはこのようなスタイルしかないと思えましたし、作る側と食べる側がミニマーケーションを常に取り合い情報を交換することによって、少量でも確実に売れるものを生産するヒントを得る事も少なくありません。

また、私たちの次女は出生時の障害から小学校の特殊学級に通つておりますが、昨年、学校から町内の小中学校の特殊学級の生徒全員で農園見学をしたいという依頼があり、ミニトマトなどを自分たちでもいで食べながら農園を見せたことがあります。普段農場に立ち入ることなどない子供たちの熱心な質問にビックリさせられながらも、小さな農園であれば「こんなこともできるんだなあ」と喜びを感じたものでした。そのほかにも小さな子供がいる家族などが、遠くは東京などからやって収穫を楽しんでいく方もおられ、農作業の手をチヨツト休めて時を過ごすことも楽しい出来事となっています。

今後は、Kitchen Garden野菜のファンの輪を広げていくことはもちろんのこと、現在野菜を購入してくださっている方たちと、より親密なミニマーケーションをはかれるよう、ちょっとした休憩場所や交流の機会を設けていきたいと思つてい



取得した土地の中にある古い家で  
選果場として利用しています

ます。また、ある程度の栽培技術が身についた時には、私たちの生産スタイルを崩さない形で系統出荷にも積極的に参画していかたいと考えています。

## 就農を果たして

私たちが担い手センターにも相談に行かずに就農できたのは、数多くの人の協力と信じられないような幸運があつたからだと思っています。

ただ、今後新規就農を目指す人達すべてが私たちのような恵まれた条件の中で就農できるわけではないことを思うと、就農する側の人達が気を付けなければならないことや、就農者を受け入れる側への要望がいくつかあると思います。

就農者が気を付けなければならぬこととしては、自分の理想とする営農スタイルが地域の農業の迷惑とならずに、その農村地域に溶け込むことができるかどうかを事前に考える」とだと思います。そのためには、就農するまでに地域の人達の話をよく聞き、話し合いをする事が大切であると思います。また、新規就農者は農業をやるために農村に移住するわけですが、私たちの経験からは、営農することよりもそこで暮らすことが大事な事であり、よい人間関係をつくり農村で暮らすことができてはじめて営農にも専念できるものであると思っています。

一方、受け入れる側に対しては、就農支援のシステムについて地域の自治体・農協・農業委員会・道の連携をスムーズに行って

ほしいという事です。私たちのケースでは、研修から就農に至るまでの事務手続きなどが理解されておりず、どこに聞きにいくても分からぬといったこともあります。

また、就農する際の確保すべき農地面積は営農形態によって違うはずですが、二㌶という面積が限りなく固定化された考え方として捕らえられているところがあつたり、就農計画上、農産物の価格設定においてあくまで系統出荷価格に準ずる傾向にあつたりなど、小規模からスタートしなければならない新規就農者にとっては、厳しい条件となるものです。長期に及ぶ就農計画においては、もう少し段階的な要素を加味した配慮がされるべきであると思います。

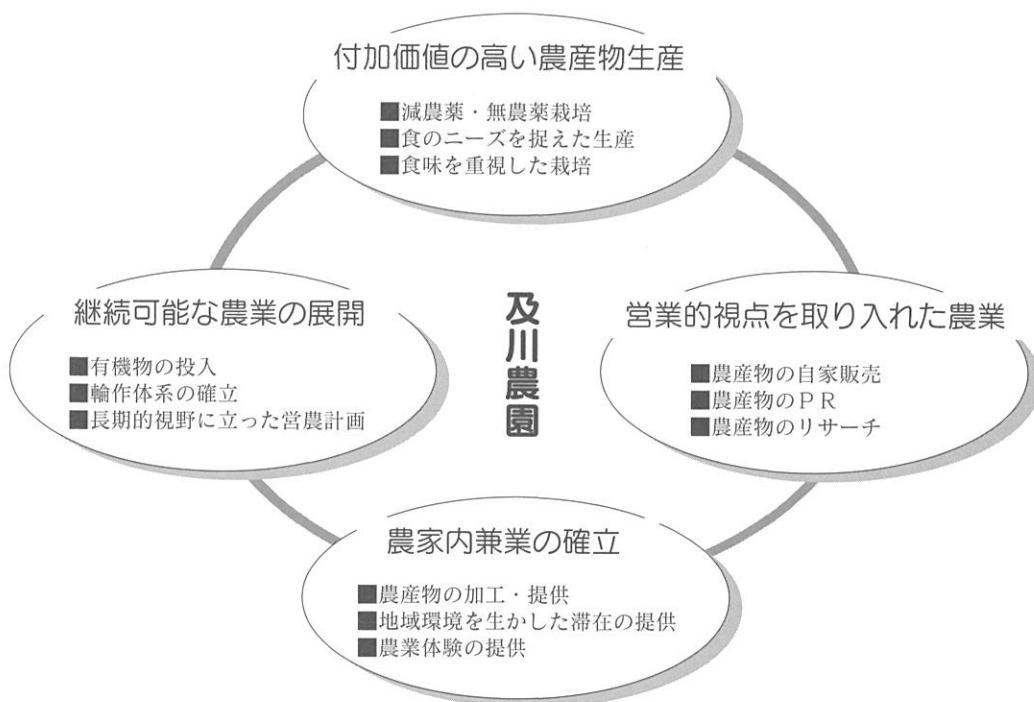
私たちの就農は、現在も農業の細部にわたるシステムや日々進歩する技術を、「聴きたい」「知りたい」「やってみたい」という気持ちで進行中です。これからも多用な情報を受けとめられる感度のよいアンテナを持ち、糸電話のように直接消費者の方とつながりを持つた農業を展開していきたいと思っています。

## 目指す農業の基本的考え方

私達が就農し目指す農業の姿としては、付加価値の高い農産物生産、継続可能な農業の展開、営業的視点を取り入れた農業の展開、農家内兼業の確立を基本的な考え方として営農していきたいと考えています。

付加価値の高い農産物生産においては、地域条件や作物の特徴

## 農業の基本的考え方



継続可能な農業の展開においては、生産基盤的な面において有機物の投入、輪作の実践を心がけ、地力の維持・保全に努めます。また、経済的な面においては、長期的視野に立った営農計画を立て、自己資金を超えるような農用地・大型機械・設備に関する投資は、極力避けるようにします。

営業的視点を取り入れた農業の展開においては、既存の系統出荷販売に加え、農産物の自家販売を行い、農産物のP R、リサーチを行いながら農産物の販路を自ら広げていくことにより経営の安定を図っていきます。

農家内兼業の確立においては、地域の農業の現状を見たときに、安定専業に達するような規模の拡大は難しく、兼業による農業経営は避けられないものと思われます。このため将来的な展望ではあるが農業の持つ多面的な機能を発揮させ、農産物の加工・提供を目的とした飲食店の展開や、地域環境を利用した農村における滞在・農業体験の提供など、當農地内で可能な業態を確立していくことを考えています。

に合せできる限りの減農薬・無農薬栽培を実践し、これらの特徴を自家販売あるいはクリーン農産物の販路にのせていきます。また、近年の多用な料理ニーズを知り、食材として必要な作物の栽培や食味を重視した農産物の栽培を行っていきます。

# 新規就農をめざして

磯谷郡蘭越町

若山 英俊

## 一、新規就農にいたる経緯

今、私たちを取り巻く環境は、経済の長引く低迷により非常に厳しく、未だ回復の兆しも見えてこない状況にあります。特に、農業情勢においてもBSE問題、食品会社による偽装事件、野菜の残留農薬問題、無登録農薬使用問題など消費者の食に対する信頼を損ない、世間から今ほど「食の安全」が注目されている時代は無かつた様に思われます。昨今のテレビ番組でも、レシピはもとより食材に重点を置いた物が増えている事にも反映されていると思います。

その様な情勢の中、私は新規就農を目指した訳ですが、もともと私は飲食店に興味があり、過去に自分で飲食店を自営したり、食材卸の会社に勤務していた時代がありました。その業務の中で自然と意識するようになつた事は食と農の関わりについて

てでした。

そして、農業へ関心を持ちつつサラリーマン生活を送っていた私にとって一つの転機となつたのは、学生時代の同級生が蘭越町富岡で新規就農を目指し研修生活に入つたことでした。この同級生との付き合いは、かれこれ二〇年以上になりますが、この話を聞いたとき、奥さんと子供三人いて思い切つた事をするものだと感心したり、たいした経験も無いのに大丈夫かと心配したり、そしてすこしうらやましく思つたりしていたものです。こうして私は蘭越町へ遊びに行く機会が多くなつていきました。

何度も遊びにいくうちに、地元の方と話す機会もでき蘭越町の自然、景観や蘭越町が北海道のなかでも大変美味しい米の産地である事、「富岡みのり会」の存在などを知る事となりました。この「富岡みのり会」の存在は、大変面白く、もともとは集落の農家若手後継者による地元の活性化を考える会（最初の名称は

## 若山 英俊（わかやま ひでとし）さん



- 1962年 釧路市生まれ  
1984年 帯広畜産大学畜産学部農業工業科卒業  
1984年 関東共立工コー物産（株）入社  
1985年 天心ラーメン弥栄店開業  
（友人と共同経営）  
1990年 （株）アートコーヒー入社（札幌支店勤務）  
2000年 蘭越町大谷団地へ転居  
2001年 新規就農研修開始  
（引き受け農家 椿 新二氏）  
2002年 蘭越町字富岡へ転居 現在に至る

地域活性研究会）であつたらしいのですが、現在の会員は農家、非農家に関係なく構成されており、春の防雪柵の解体、夏の盆踊りや、町営宿泊施設「ふれあいの郷」の運営など、色々な意味で今では地域になくてはならない存在になっています。

また、この富岡という地域は、よくある田舎特有の排他性が希薄な所で（自分が気づかないだけかもしませんが）、特に他所の土地からきた新参者については地域に馴染みやすく、土地柄、人柄の器の大きさを感じさせてくれる所でもあります。

この様にして、農業と富岡という地域に魅力を感じた私は、新規就農を目指しました。

### 一、研修内容

就農するまでの二年間を日途に研修期間とし、就農支援資金（就農研修資金）を利用して、受け入れ農家は、前出の「みのり会」会長の椿新二氏に引き受けてもらえることになり、研修生活に入りました。一年目は、椿氏が米農家という事もあり、主に稻作に関わる作業技術の取得、二年目は椿氏の意向もあり、稻作に加え施設野菜なども大幅に作付けし、野菜の栽培技術なども研修しました。

以下に、主な研修内容を作物ごとにまとめました。

- ◆ 稲作・・・ほしのゆめ、きらら397 作付面積 約7ha  
研修内容 精耕き、育苗、田植え、水田管理（畦草刈り等）、防除、稻刈り、乾燥・調整、出荷。



稻刈りは、農家4軒が集団となり、富岡ライスセンターを運営し稻刈り、乾燥・調整、出荷までを共同作業し、4軒でコンバイン3台にて約30haの作付面積をこなす。私は主に、センターに入り、乾燥・調整の研修を行った。



生後3週間程度で水田に放す。「みのり会」にて5%程度の水田だが試験的にアイガモ農法の試みも行った。私はアイガモの放田までの管理と放田後の水田管理を手伝った。ちなみに、田植えは町内の小学生が農業伝承塾の一環で行った。

- ◆ 畑作・・・ハウストマト、スイートコーン、かぼちゃ、グリーンアスパラ  
研修内容 播種、育苗、定植準備（施肥・耕起・マルチ敷など）、定植、  
収穫、選果、出荷。



ハウストマト・・・苗数 1500 本 品種 ハウス桃太郎  
ハウス内では、他にナスビ、ピーマン、ミニトマト等も栽培した。



スイートコーン・・・苗数 14000 本 品種 味来  
時期を 3 回に分けて育苗・定植した、圃場は休耕田。他に、露地栽培  
ではかぼちゃ、グリーンアスパラの栽培研修も行った。

前記の他に、JA・普及センターによる青空教室への参加、中古農機展示会の視察、野菜直売所の設置なども研修しました。

### 三、今後の課題

- ① 農作業機械の作業技術・知識。
- ② 天候等の諸条件を考慮した作業の優先順位の判断。
- ③ 定植作業等の適期判断。
- ④ 各農作物・各品種の特性・生育条件等の性質。
- ⑤ 各作業における正確性・重要性・作業スピードの度合。
- ⑥ 肥料・農薬に対する知識。

以上が研修中に得た課題であり、まだ気がつかない点が多くあるとは思われますが、今後この課題をより早く解決していく為に、近隣農家、JA、普及センターなどより情報を得たり、指導を仰いだりしていく事が大変重要なになってくると思われます。

### 四、當農にむけて

この様な経過を経て、今春より當農する予定ですが、今後一番念頭に置いておかなければならぬ事は、技術面、資金面でかなり不足している私が、どの様にしたら農業を続けていけるかを考え実践していかなければ、すぐに行き詰まってしまうという事です。実際、何十年も農業を続けている先輩達のすべての人掛けつして楽な生活を送つてゐる訳ではありませんし、むしろ楽な



自作の住宅と4駆の愛車

生活をしてる人の方がすくなじでしょ。

また、全国には約八万箇所の市民農園、貸農園があるというが、そこで農業体験をするたちは農薬を使わないで作物を収穫する難しさや、毎日食べている野菜の価格が労働に対していかに安いかを実感するそうです。私も研修を経験して思う事は、一次産業の中でも、これほど労働力と賃金が見合わない職業はないのではないかと感じました。仕事をしてもサラリーマンの様に一ヶ月先に決まった給料ができる訳でもなく、むしろ一ヶ月先にお金になる作物などはほとんど無い、三ヶ月、半年、一年を通じてやつとお金になる作物の方が多いでしょう。サラリーマンを続けていた方が、よっぽど楽な仕事と生活が送れていたと思います。しかし、農業にはその様な現実を考慮しても、それ以上の魅力と可能性があるのでないかと私は思っています。

ただの生活手段として農業を選んだのであれば、他にもっと割りのいい職業はいくらでもある訳ですから、わざわざ困難な道を



選ばなくとも良いことになります。また、なんらかの魅力や可

能性がなければ日本の農業人口は今以上に減少しているのではないかと思われます。

ただ、魅力と可能性の追求は農業に何を求めるかで違つてしまます。人によつては、金銭面であつたり、収穫の喜び、消費者の好反応であつたり、自然を相手にしての作業だつたり様々であろうと思います。

「継続は力なり」といふ諺葉にもあるとおり、農業を続けていく事でしか見えないものがあると思います。この農業を継続していくことが、私が今一番目標としている事です。

この先、一生涯営農していく為には、今後、想像もしなかつた様な諸問題をクリアしていくなければならないと思います。問題に直面した時、頼りになるのはやはり近隣農家の先輩の方々だと思います。そういう意味では蘭越町富岡の人達、特に「みのり会」の方々は非常に頼りになる存在です。これからも今まで以上にお世話になるとは思いますが、少しでも早く逆に頼られる人間になりたいと思います。

また、長期展望としては地域に溶け込み、ある程度の農業基盤が出来た時点で、産地直送の取り扱い、直売所の開設、農家レストランの営業などをやりたいと思つています。

この様にして農業を続けて行くことができたなり、一生涯の仕事として農業を選択した事が自分にとって正解であり、今後充実した生活を送つていけると思つています。

# あなたはスロー派、 それともファスト派？

### 禿老児

近年、注目を浴びてゐる言葉の一「スローフード」あるいは「スローフード運動」をあげることができます。この言葉を聞いた誰でも反射的に頭に浮かぶのは、「ファーストフード」でしょう。この言葉を、私たちは日常的に、「ファーストフード」と延ばして発音することが多いのですが、これは明らかに誤用です。F-i-r-s-t (最初の) ではなくF-a-s-t (速い) のですから。そして、この「ファーストフード」の典型として頭に浮かぶのは、「マクドナルド」のハンバーガーや「吉野や」の牛丼、あるいは「パンピーニ弁当」です。

注文すると、「大勢の客でも」「素早く」「安価に」提供される簡便軽食で、その「味」は、九州で食べても北海道で食べても変わらないことも大きな特徴です。それは、大量仕入れの一食材を統一化された調理法、すなわち徹底的に「マニュアル化」された調理の産物なのですが、二十世紀の、スピード、効率、大量、安価追求という価値尺度にマッチして、ややおおげさに言えば、全地球的に広がつたものと言えましょう。

この「ファーストフード」は、単に簡単な食品や調理品を指すだけにとどまらず、ライフスタイル（生活様式）や価値観を象徴するものと捉える必要があるでしょう。

この「ファーストフード」そのものと、「ファーストフード」的ライフスタイルの反対の極にあるものとしての「スローフード」運動が、

イタリア北部で囁々の声をあげ、またたく間にヨーロッパ全域、やがて日本をはじめ世界的なムダがつの巻せいへます。

日本ではじめ世界的な広がりを見せていました。

そもそも原点は、その地域固有の食材を用いた家庭的な伝統料理に回帰しようとしたことから始まつたと聞いています。地域生産の

食材は新鮮ですし、素性も明らかです。

家庭料理は、その家庭に代々伝わってきた固有の味を持つていて、団らんの中で囲む食卓では、会話が弾み暖かくミミーケーションが生まれます。

そこは、「効率」とか「早く」とか「大量に」では無縁の世界です。私たちが失つてきた、あるいは失つてきたことすら気がついていないものを、再び見出し大切にしようというのが底流になつていてます。

このような、運動がヨーロッパの片隅から巻き起こしてみたい」とも大きな意味があるのでないでしょうか。「スマートフォード」の代

表であるハンバーーガーなどがアメリカから生まれたことでも判る  
よう」、「まさに」「効率」「大量」「低」「スト」「マ」「ユアル化」など

を世界の先陣を切って実践してきたのがアメリカであり、日本をはじめ先進諸国もまた、それに追随して来たのです。しかし、それで得た「利便性」などの代償として、「ゆったりとした時間」「個性的な生き方」「団結・協調」などが失われたのではないかでしょうか。まさに今、この「スピードーフィード」運動は、ある意味では、この「アメ

リ力的価値観・生活様式」からの訣別を迎むるものとも言えましょう。地域の食材を地域で消費する、いわゆる「地産地消」とも密接な関わりを持つていまおもし、近年のもつとも重要なキーワードである「食の安全」をも包摂するものですね。

それと、単に「豊かで、安全な食生活」の追求に留まらない、「イフスタイルの再検証」という問い合わせがなされちらぬと感ずるのです。

ヒトが、いつたん獲得した利便を放棄する」とは困難であるのは、近所にある「ハピ」が無くなつたらと考えただけでも想像ができる。しかし、系列化された「ハピ」の存在が、街なかの小さな飲食店や雑貨店などを消滅させたことを忘れてはならないでしよう。これを競争社会における優勝劣敗の当然の結果と見るか、地域「ハピ」の重要な構成要素が失われてしまつたと考えるかです。

「おのれへ、おのれへ、おのれへを求めて心慌ただしくして、私たちは『じい』に向かいのぞみうるか。おやじ」「そんなに急いで『じい』へ行く?」です。さあ私たちの一十一世紀の根源的な生き方そのものが問われてゐるのじゃ。もし、あなたは、スロー派ですか、ファスト派ですか?。

essay

# 「北海道大好きな旅」 その4

## スローフード? グリーンツーリズム?

食農わくわくねっとわーく北海道  
事務局 長尾 道子

スローフード…この言葉に出合ったのは、確かに四年以上前だったと記憶している。喫茶店で何気なく見ていた雑誌に特集されていた。ちょうど時を同じくしてグリーンツーリズムという言葉にも出会い、田舎に興味が沸き始めてきたところであった。以来「スローフード」や「グリーンツーリズム」という言葉や動きについてじぶんが気になっていた。

昨年の二月にグリーンツーリズムが縁で、スローフードを日本に広く伝えた「スローフードな人生」の著者、島村菜津さんにお会いする機会を得た。短い期間では会ったが、柔らかな口調で話してください

るの内容は私にとってはとても興味深いものであった。一〇月には一年に一度の食の祭典「サローネ・デル・グスト」が開催されるとの事。「ん～これは一〇月に合わせて、スローフードが生まれた国に行くしかないでしょ！」じつうことになり…菜津さんを勧めさせてくれた九州の友人に声を掛け、北海道の知り合いと共にイタリアへ行くことになった。

今回はミラノ出身の友人が私たちのわがままをすべて聞いてコーディネートしてくれた。こうしてアグリツーリズモ体験とサローネ見学、イタリア食文化をめぐる見学と取材を兼ねた旅がスタート…



## 長尾 道子（ながお みちこ）さん

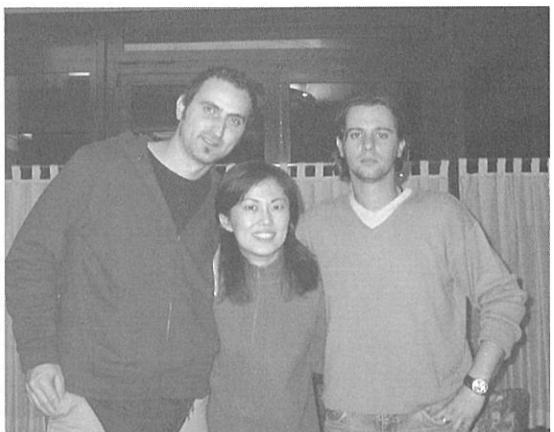
藤女子短期大学卒  
平成4年ホクレン入会  
平成7年より6年間、PR誌  
「Green」の編集業務を担当  
現在は「食農わくわくねっとわー  
く」事務局長

前半はスローフード発祥地、  
ブリ（人口二万人）から三〇〇  
分、デリヤードという小さな  
小さなマフ（人口二千人）の  
ワイン農家に五泊することに  
なった。

ここのおーーーのブルーー  
さんニアグリツーリズモの感  
想を聞いてみると、「とっても  
忙しくなったけど、すごく樂  
じよーーワインのお客さんも  
招待できるし、君たちみたい  
にわざわざ来てくれる人もい  
るし、鳥小屋の有効活用も出  
来たことだしね」と楽しそう  
に語るのだ。私たちが泊まつ  
た建物は鳥小屋だったとは思  
えないほどにきれいに大変身  
していく。また、初日は到着  
が遅かったので特にママお

手製の夕飯を用意していろ  
れたり、オーナーとその妹さ  
んをお誘いして、旅仲間のお  
誕生日を一緒に祝つたり、夜  
中遅くまでワインとチーズで  
片言のスペイン語と英語で語  
り合つたり…あまりに樂しく  
て、新幹線のよひに過ぎた五  
日間だった。

さて、後半は農家レストラ  
ンやアルバのトリュフ祭り、  
パルミジャーノ・レッジャー  
ノとランブルスコワインが造  
られている小さな村レッジオ、  
徹底した管理と製造法のプロ  
シユートが作られる町パルマ、  
今年のワインコンテストでナ  
ンバーワンになつたキャン  
ティ・クラシコの超山奥の小  
さな小さなワイナリー…そ



my friend's

他にピエモンテ州政府の方やアグリツーリズモ協会、COOPやケープルトーレのコーディネートまでする雑誌社力ンベロ・ロッソ・イタリアの食や農に関わる人たちに出会う旅となつた。

話には聞いていたが、どのはみなに「もっと高く売るうとか、量産しようとか思いま



パルミジャーノ

愚問だと思いながらも、私は彼の言ふことを聞いていた。しかし、安心院での出来事や北海道で頑張っている友人の顔が浮かんできたのだった。

伝統や誇りを守つていた。皆一様に「特産品を生み、育てる地域の集まりがイタリアなのが」とか「土を耕すことから文化が始まつただの」、「やつぱり、うちの町が一番さー」と話す。パルミジャーノの職人は

せんか?」という問いを投げかけた。途端にみんな私を半ば呆れ顔で「けつーこれだから困るよ」と言い放ち、そして一様に「質を下げるためにも、大量生産はいけないよ。それにこの町を代表するものを作り、私たちはとても名誉な仕事をしているのだからーお金じゃないよ、質だ!」と

力説された。恥ずかしかった。今回の旅で、スローフードの理念はイタリア人は当たり前に持つてているものなんだということを実感した。だから地元の人たちはみんな、スローフード協会のことを「彼らは当たり前のことをしてゐるんだよ」と話す。地元の人は「彼らの町を世界に紹介し、地元が元気になつたのは確かだね。僕らもここに住んでいていろんな人に会えるから、そこは彼らは凄いよね」と。



プロシュート



プロシュートの説明

二週間のイタリアの旅は、  
あつとじつ間に過ぎた。

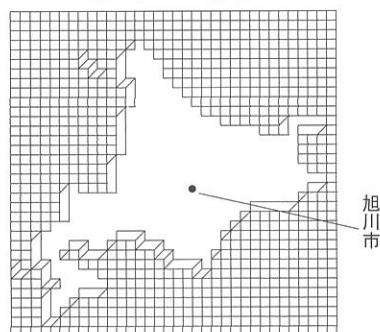
今回書いてきた「旅」は人とのつながりから生まれた、心があつたかくなるものばかりを紹介してきた。こんな旅が出来るようになつたのも、グリーンツーリズムやスローフードなどの言葉や多くの人の出逢いがあつたからこそ。安心院から始まり、十勝、由仁、そしてイタリア…どの旅もいろんな人たちからの優しさや情熱、思いやりの気持ちをお裾分けしていただいた。思ひ起こせば、どれも一貫しているのは住んでいる人たちがその地域での生活を楽しみ、大切に思い、農の素晴らしさや先代の知恵や術に感動し、

守り続けていたことだ。

そのお陰で、単に旅と食べることが好きだけだった私は、田舎の重要な人に気付き、自分自身を見直し、生きていこうと真剣に考え始めた。私のモットーである「乐しく、おしゃべ、心豊かな生活」。これを実践するにはまず、自分と両親や兄弟、友人や知人、自然環境…など固りとの関係をもう一度見直すことから始まると思っている。

それするためにも、私はこれをお裾分けしていただいた。これからも「北海道大好きな旅」を続けようと思う。そして一人でも多くの人に出会い、一人でも多くの人にそれを得た感動を伝えていこうと思う。

## 連載



あのマチ・地域おこし活躍中  
このムラ

No.31

### 有限会社コントラクター旭川の事例

とから、水稻の生産に恵まれた地域となっている。

そのため、一九七〇年代前半までは域内の農家の大半が

稻作単一経営となっていたが、

ともに、その割合は低下して

米の生産調整が強化される

いき（ただし、一九九五年の

み減反緩和の影響により反転

して上昇）、代わって転作作物

である春菊、パセリ、小松菜、

チングンサイなどの野菜を基

幹とする農家の割合が増加し

ていった。事実、一九八五年から二〇〇〇年にかけての経営組織別農家数の推移をみると、それに該当する「野菜または施設単一経営」（一・〇%

↓ハ・ハ%）、「稻作首位で野菜または施設首位の準単一経営」（一・一%→六・四%）、

「野菜または施設首位の準單

一経営」（一・五%→七・三%）、

「複合経営」（二・〇%→二・

七%）のシェアは、いずれも

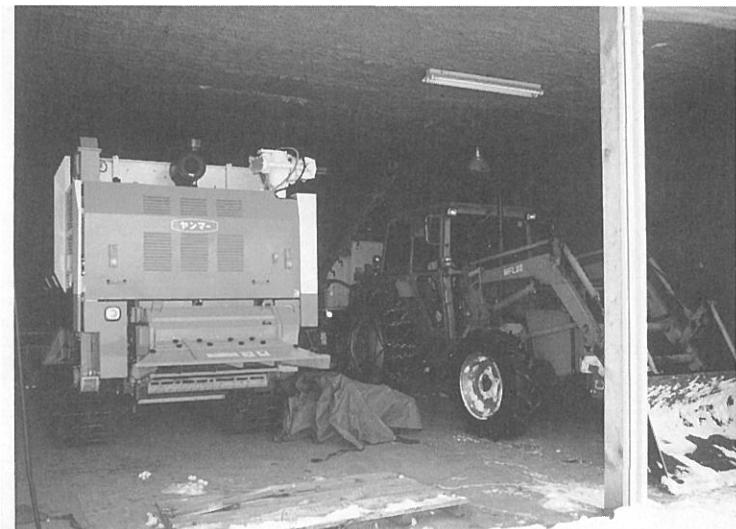
そして、それとともに稻作付面積は減少していくのである（一九八五年二・九二一ha→二〇〇〇年二・四五〇ha）。し

かし、面積が減少したのはこれだけではない。この間、水田面積（一九八五年四・五九ha→一〇〇〇年三・六二九ha）や経営耕地面積（一九八五年四・ハハ三ha→二〇〇〇年三・ハ〇二ha）も大幅に減少しているのである。ただし、

これらの減少は、集約部門の拡大していることがわかる。

◇有限公司コントラクター旭川の位置する旧東旭川町の農業の動向

有限公司コントラクター旭川の位置する旭正地区は、旭川市の南東部、旧東旭川町の南部に属する地域である。ほぼ全域が平坦地で、しかも地区内を流れる忠別川と牛朱別川によって形成された沖積土が広範にわたって堆積するこ



コントラクター格納庫

伸張というよりも、あとづぎの減少→農家の高齢化→離農の増加といった一連の動向によつて生じたものと理解した方が適切であろう。なぜなら、同居農業後継者およびあとづぎのいる農家数の減少（一九九〇年三五九戸→二〇〇〇年二三九戸）、六五才以上農家世帯員数の割合の増加（一九八五年一九・一%→二〇〇〇年三四・七%）、総農家数の減少（一九八五年一、六一九戸→八〇四戸）などが同時に確認できるからである（カツコ内の数値は、すべて旧東旭川町のもの）。

#### ◇ 有限会社コントラクター旭川による地域農業支援の実態

#### 一、設立までの経緯

#### コントラクター旭川の実態

をみる前に、旭正地区で支援組織が必要とされた背景から述べておこう。概略的にみれば、それは二つの事情からなるといつてよい。まず第一に、米の生産調整以降、転作作物である野菜の作付が増加し、それに伴い農家の労働力が逼迫したという点である。具体的に述べれば、野菜作に傾斜した農家の稻作作業に関わる労働力不足、ならびに稻作の規模拡大を果たした農家（主に稻作面積二〇畳以上の農家）の転作作物の作業に関わる労働力不足が深刻になつたということである。第二に、米価が低迷した一九九〇年代中盤以降、高齢農家および農の増加とともに稻作の規模拡大志向農家が減少し、その結果、受け手のいない遊休農地が増加してしまつたという点である。



冬季除雪作業

つまり、この地区では、一九九〇年代の中頃から、労働力不足の対応と遊休農地の保全といった二つの課題に寄与する支援組織の設置が求められたということである。ただし、前者に関しては、一九七五年に旧旭正農協（一九〇二年二月、周辺四農協と合併し旭川農協となる）が農作業受託事業を立ち上げ、すでに耕起、整地などの作業を請け負つており、その意味で、以前から実施されていたとみることができる。しかし、この事業は、ホクレントラック（ホクレン物流部が担当する農産物輸送業務の通称）の臨時職員四名が本務の合間を縫つて行っていたものに過ぎず、したがって上記の二つの課題に対応できる能力を有しているとは言い難かった。そこで、農協は、この事業を発展的に

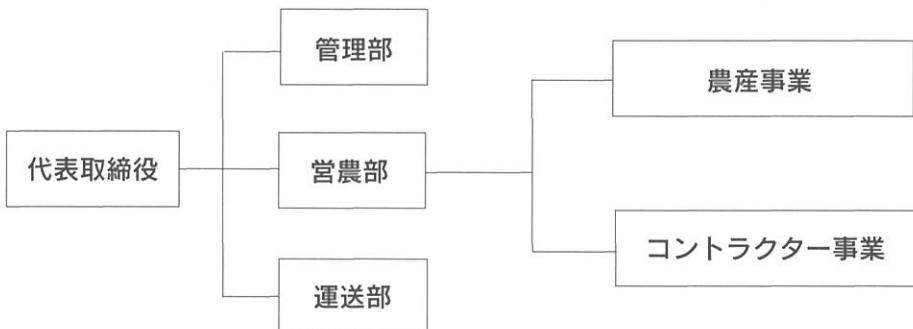
九九〇年代の中頃から、労働力不足の対応と遊休農地の保全といつた二つの課題に寄与する支援組織の設置が求められたということである。ただし、前者に関しては、一九七五年に旧旭正農協（一九〇二年二月、周辺四農協と合併し旭川農協となる）が農作業受託事業を立ち上げ、すでに耕起、整地などの作業を請け負つており、その意味で、以前から実施されていたとみることができる。しかし、この事業は、ホクレントラック（ホクレン物流部が担当する農産物輸送業務の通称）の臨時職員四名が本務の合間を縫つて行っていたものに過ぎず、したがって上記の二つの課題に対応できる能力を有しているとは言い難かった。そこで、農協は、この事業を発展的に

解消し、充実した労働力の提供と農地の保全に対応できる新たな支援組織の設置を検討する。そして、一九九七年五月、これら二つの役割を果たす組織として、有限会社コントラクター旭川が設立されるのである。

ところで、この組織は、設立にあたり、農業生産法人の認証を受けている。それは、すでに発現している受け手のいない農地を、最終的には所有していかなければならぬと考えたからである。また、企業形態については、経営責任の明確化と独立採算制の維持を目指すため有限会社が選択されている。さらに、一九九八年には、地域農業支援の実績が評価され、地域連携型法人にも認定されている。

資本金は一、九五〇万円で、その内訳は農協の出資が九五

図1 有限会社コントラクター旭川の機構図



注) 有限会社コントラクター旭川提供資料より作成

○万円、地区内の農家の子弟でもある構成員六名（全員男性、年齢は三〇代一名、四〇代一名、五〇代四名で、これらのうち三〇代の一名と五〇代の一名を除く四名が元ホクレントラック臨時職員）の出資が一、〇〇〇万円となっている。このように農協の出資を過半以下とした理由は、法人の自主運営体制の構築を目指そうとしたからにほかなならない。

また、構成員は八名からなり、うち六名が出資者である地区内の農家の子弟、組合長（現旭川農協

専務理事）、一名が農協経済部長（現旭川農協旭正支所長）となっている。代表取締役には、これらの中から、農家の子弟のうちの一名（元ホクレントラック臨時職員五二才男性）が就任している。

## 二、運営体制

当法人の体制は、経理を担当する管理部、農産事業とコントラクター事業を担当する営農部、運送事業を担当する運送部の三部からなる（図1参照）。業務分担は管理部長（農協支所長が兼務）が受け持つ経理を除き特段決まっておらず、出資者である六名の構成員がすべての事業に携わることになる。また、このほか、繁忙期に限り、コントラクター事業の業務に年間一〇人程度の臨時雇用（全員地区内）の農家の子弟）が導入され

ている。

## 三、機械・施設

現在、法人が利用している機械は、その多くが法人設立前に農協の農作業受託事業で使われていたものである。たとえば、トラクター六台、ロータリー四台、刈払機四台、融雪剤撒布機一台、ブロードキヤスター一台などがそれに該当する。しかし、これらは、いずれも法人設立時に農協から無償で譲渡され、現在は法人所有となっている。このほか、法人設立後に導入した機械がいくつかあるが、そのほとんどは、補助事業を通じて導入したものとなっている。たとえば、無人ヘリコプター、豆真空播種機、豆脱穀機、豆乾燥機は、一九九八年に地域連携型法人の支援策（五〇%補助）を、バックホールは、一

表1 有限会社コントラクター旭川の年次別事業実績と作業単価

|           |           | 1999年   | 2000年     | 2001年     | 作業単価                          |
|-----------|-----------|---------|-----------|-----------|-------------------------------|
| 農産事業      | 水 稲       | 6.9ha   | 6.4ha     | 7.4ha     |                               |
|           | 小 豆       | 1.9ha   | -         | -         |                               |
|           | 大 豆       | 1.9ha   | 0.9ha     | 2.0ha     |                               |
|           | 小 麦       | -       | -         | 2.8ha     |                               |
|           | えん麦       | 0.7ha   | 4.2ha     | -         |                               |
|           | 牧 草       | 1.6ha   | 1.6ha     | 1.6ha     |                               |
| 面積(計)     |           | 13.0ha  | 13.1ha    | 13.8ha    |                               |
| 売上高(計)    |           | 1,453万円 | 809万円     | 918万円     |                               |
| コントラクター事業 | 耕起・整地     | 430h    | 263.9ha   | 378.4ha   | 2,300円/h                      |
|           | 施 肥       | 576.1ha | 519.2ha   | 181.4ha   | 200円/袋                        |
|           | 溝切り       | 45.5ha  | 61.4ha    | 29.0ha    | 3,500円/h                      |
|           | 心土破碎      | 71.6ha  | 34.7ha    | 72.6ha    | 1,750円/10a                    |
|           | 播 種       | 51.8ha  | 47.9ha    | 232.4ha   | 2,100円/10a                    |
|           | 防除・除草     | 667.0ha | 1,118.7ha | 1,207.2ha | 1,500円/10a                    |
|           | 草刈り(転作水田) | 95.0ha  | 56.8ha    | 56.8ha    | 2,600円/10a                    |
|           | 集草・梱包     | 33.0ha  | 21.9ha    | 29.4ha    | 1,800円/10a + 150円/個           |
|           | 脱穀(小豆)    | 24.5ha  | 33.5ha    | 15.4ha    | 3,600円/10a                    |
|           | 乾燥・調整(大豆) | 479俵    | 1,516俵    | 4,892俵    | 1,300円/俵                      |
|           | ユンボ       | 1,370h  | 966.5h    | 1,358h    | 4,200円/h (0.3m <sup>3</sup> ) |
|           | 除 雪       | 4カ所     | 614万円     | 566万円     | 3,600円/h                      |
| 収穫(大豆)    |           | -       | -         | 101.6ha   | 7,500円/10a                    |
| 売上高(計)    |           | 4,089万円 | 5,329万円   | 7,694万円   |                               |
| 運送事業      | 野菜運搬      | 850万円   | 547万円     | -         |                               |
|           | 米穀運搬      | 436万円   | 606万円     | 432万円     |                               |
|           | 一般資材運搬    | 399万円   | 232万円     | 262万円     |                               |
|           | 売上高(計)    | 1,685万円 | 1,385万円   | 694万円     |                               |

注1) 有限会社コントラクター旭川提供資料より作成

注2) - は実績なしを示す

注3) 豆の施肥は、2001年以降、播種へ移管されている

九九八年に市の農業振興条例（五〇%補助、支払最高限度額三〇〇万円）を活用して導入したものである。また、法人の主要施設は事務所と農機具格納庫（一棟）となるが、これらはいずれも農協から賃借しているものである。

#### 四、事業の概要と実績

はじめに農産事業からみていこう。この事業は、受け手のいらない農地を保全するため、法人がその農地の借り手となつて農業経営を行うものである。端的に述べれば経営受託ということになる。したがつて、委託者には地代が支払われており、それは農作物売上高から諸経費を差し引いた残高となつてゐる。

にみるように、情勢の悪化に伴い、一方で受託面積が一九

九九年一三・〇糲→一〇〇〇年一三・一糲→二〇〇一年一三・八糲と増加傾向、他方で売上高が一九九九年一・四五三万円→二〇〇〇年八〇九万円→二〇〇一年九一八万円と停滞傾向にある。ただし委託戸数は、一九九九年以降、戸で推移しており（うち一戸は代表取締役で、その受託面積は四・七糲）、まったく変化していない。

九九年一三・〇鉛→二〇〇〇年一三・一鉛→二〇〇一年一三・八鉛と増加傾向、他方で売上高が一九九九年一・四五三万円→二〇〇〇年八〇九万円→二〇〇一年九一八万円と停滞傾向にある。ただし委託戸数は、一九九九年以降、戸で推移しており（うち一戸は代表取締役で、その受託面積は四・七鉛）、まつたく変化していない。

次にコントラクター事業をみてみよう。このでの受託作業は、表1に示したように、農産事業同様、米、豆類、麦類、牧草に関わるもののが中心となる。その委託戸数は、二〇〇一年現在一四一戸を数え旭正支所管内の農家組合員（正組合員のうち農家の定義に入るものの）戸数二七一戸の五二%を占めるものとなつてゐる。また、これら労働力の逼迫した委託農家は、前述のように、野菜作を積極的に導入した農家と稻作の大規模化を果たした農家の二類型に区分できるが、後者に属する稻作付面積二〇ha以上の農家は全体の一四・二%（一四一戸中二〇戸）を占めるにすぎずしたがつて、そのほとんどは前者に属する農家ということになる。

高の伸張（一九九九年四、〇  
ハ九万円→一〇〇〇年五、三  
二九万円→一〇〇一年七、六  
九四万円）や新規受託作業の  
導入（一〇〇一年から実施の  
大豆収穫）が確認できるよう  
に、着実に増加しているとみ  
ることができる。中でもすべ  
ての委託農家が利用している  
防除・除草は、受託実績の増  
加が著しく（一九九九年六、云  
七・〇鈴→一〇〇〇年一、一  
一八・七鈴→一〇〇一年一、  
二〇七・一一鈴）、今や旭正地区  
の稻作付面積一、二七七鈴の  
九四・五%を受け持つものと  
なっている。

ただし、表にみると、  
すべての作業の受託実績が増  
加しているわけではない。た  
とえば小豆の脱穀のように、  
当該作物の作付面積が減少し、  
た作業については、当然ながら  
その分、受託実績も減少

(旭川市、旭川農

は、農産事業において農産物

協旭正支所、東旭川農協、東旭川町農民連盟、旭川市農業委員会東旭川地区協議会で構成）で定められたものが採用されている。具体的には表1に示したとおりである。

運送業務への労働力の投入が困難となり、結果として、その事業規模は縮小せざるを得なくなっているのが現状である。事実、表1にみるように、二〇〇一年度には野菜運搬業務が中止となり、また、その影響も加わって、事業売上高は、一九九九年一、六八五万円→二〇〇〇年一、三五八万円→二〇〇一年六九四万円と

困難となり、結果として、その事業規模は縮小せざるを得なくなっているのが現状である。事実、表1にみるように、二〇〇一年度には野菜運搬業務が中止となり、また、その影響も加わって、事業売上高は、一九九九年一、六八五万円→二〇〇〇年一、三五八万円→二〇〇一年六九四万円と大幅に減少となつてるのである。

は、農産事業において農産物販売高の上昇が期待できない点、コントラクター事業において効率の良い作業の実施が困難な点、収益部門であつたはずの運送事業においてその事業規模を縮小しなければならなかつた点などをみれば明らかとなろう。要するに、役職員の懸命な努力がなければおそらく上記の経営成果は得られなかつたと考えられるのである。

最後に運送事業の概要をみておこう。この事業は、かつて当法人の構

◇  
おわりに

していくことになる。また、委託者の農地が管内に分散しているため、ここでの作業効率は決して良いものとはならない。

ラックの嘱託職員として取り組んでいた業務である。これを、当法人は、営農部の赤字を補填する収益事業とみなし、法人の業務の中に取り入れたのである。

しかし、本務となる営農部の業務が多忙になるとともに、

期利益は二一六万円であった（総収入八、六〇三万円、総支出八、三八七万円）。すなわち、当法人は黒字収支で運営されているのである。しかし、その経営基盤は、決して安定的なものとはいえない。それ

それゆえに、当法人は、安定期的な経営基盤を如何に確立していくかが今後の課題になつてゐるといえる。具体的には、収益事業の新設、あるいは多くの農家に貢献していく実績を拠り所とした公的支援の取得などがそれに該当するだろい。



JAあさひかわ 大懸センター長（右）から取材する井上研究員

特別寄稿

# カレーを巡る感情的断章

ペンネーム

# 確田 素州

「おま、結論から申しつけむの、『田舎でつづたカレー』ライスに勝るものはなう」と云ひましたよ。

待感と幸福感は、何ともいえないもので、スーパーのビール袋を抱えたいつもの肥育雌牛が、大根を持った松坂慶子くらいにまでグレードアップして見えたものでした（どうがんばっても黒木瞳には見えないが……）。そして現在は、妻の作ったカレーを供達と競い合って皿をなめるように食べています（残念ながら妻はいつもの妻にしか見えない、何故だ）。

いずれも、リンゴとハチミツがとろ~り溶けこむようなインスタントのカレールウ（ヒドキ☆）を用い、一ーンジンと馬鈴薯がゴロゴロしている典型的な家庭料理としてのカレーですが、どんな飲食店のカレーでも、この味、といつか、この“食べる”ことによって得られる満足感”を超えることは不可能でしょうね。それは、郷愁であると同時に暖かい家庭の象徴だからです。

もうども、人によつては、"うちは農家だつたので、農繁期はつくりおきのカレーが何日も続いた"とか、"両親が共稼ぎだつたので、いつも一人でレトルトカレーを温めていた"とか、"太つてい

## はじめに

たのでカレーを食べていると、キレンジャー扱いされた”というような不幸な幼年期の思い出をお持ちの方もいらっしゃると思うます。

いずれにしても、カレーとはあまりにも口常的な食べ物であるが故に、外食だけでどうえることが極めて困難です。そこで、今回はカレーについて、生活との関わりを念頭に置きながら、たつぱり感情を込めて記述していきたいと思います。

## ▼ 青少年期におけるカレー体験の典型的パターン

繰り返しになりますが、カレーは口常的であるがゆえに、生活の様々な場面で登場いたします。ここでは、ある男性の成長の過程とカレーを媒介とする出来事を例示的に見ていきましょう。

一六歳・林間学校でキャンプした日の夕食は、自分たちでカレーを作った。馬鈴薯やニンジンの皮だけでなく、蛾や蜻蛉まで入っていたが、友達と騒ぎながら何杯もおかわりをした。夜、テントの中で、好きな女の子の名前を教えていた。一番仲の良い友達と同じ女の子が好きだったが、むしろそれが嬉しく感じられた。好みが似ていることも小さな秘密を共有できたことも嬉しかった。恋のライバルなんて概念もなかったのだ。

九歳・はじめて父と二人でドライブに行つた時、国道沿いの薄汚いドライブインでカツカレーを食べた。祖父が入院していため母は看病で忙しかったのだ。きっと父も仕事で疲れていたのだろうと思うが、バカな息子のわがままにつきあつてくれたのである。

「うん・・・」

こんなふうに、会話も少なかつたと思う。今になつて父の愛情が痛いほどよくわかる。

一六歳・友人達計四人でカレーの辛さを一〇段階に選べる店に入つた。あまり辛いものは得意ではないのだが、バカにされるのが嫌なので一番辛いカレーを注文した。皆、思いは同じようで、結局全員が一番辛いカレーを頼んだ。

「バカヤロー、こんなのかレーじゃねえよー」

四人ともさんざん文句を言い合い、泣きそわになりながらもなんとか食べ終えることができた。

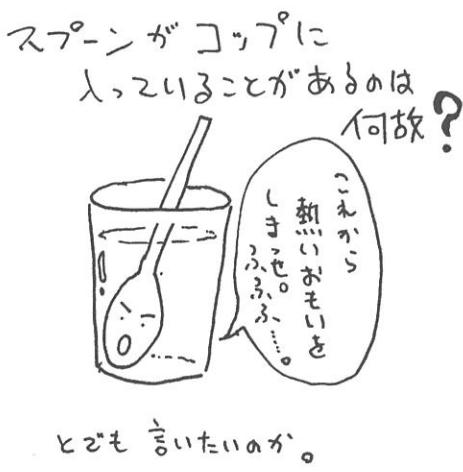
「なんだ、あんまり辛くなかったよな。」(よくこうよ)

完食記念のポラロイド写真がしばらく店内に飾られていた。

一九歳・・一人暮らしをはじめてからしばらくして、彼女が料理を作りに来てくれた。初めて見るエプロン姿の横顔が愛おしかった。悪戦苦闘の末できあがつたシーフードカレーは極めて前衛的なものであつた。

「お食事はもう少しでいいわ。」

彼女は泣きそうな顔をした。キスもカレーの匂いがした。



二歳・いいかげんな女性関係がもとで、サークル内の人間関係が悪化していた。合宿の夜、芸能人の経営するカレー店に行つた頃に気まずさは頂点に達していた。宿舎に帰った後、ウケをね

いやあ、生きぬいていたことは、業が深いのです・・・、じやなくて、このようにカレーは人生の節々で重要な役割を果たしているものなのです。味の記憶など一切ありませんが、カレーを巡る思い出は魂を震わせます。

**注** これらの例示は、典型的なカレー体験を記述したもので、筆者個人の体験に基づくものではありません。たぶん。

## 力レーの導入経緯と応用形態

むし、これほどまでに日本人の生活に深く根づいたカレーは、インド料理というイメージがありますが、日本の場合、明治期以降、洋食の一つとして、カレー粉を用いた料理として、イギリス経由で導入されました。米飯食であったことや軍隊食として利用されたこともあり、明治末期から大正初期には洋食への第一歩的な料理として普及していくようです。

そして、カレー粉の普及とともに、国民全体に普及していくなかで、カレーパンやカレー丼等といった応用形態が誕生することにな

ります。

快感です。

以下では、カレーライスの応用形態について簡単にコメントをさせていただきます。

### ③ 各国風カレー

北海道ではお目にかかりませんが、関東ではそば屋のメニューとして一般的です。要するにご飯にカレー・南蛮のつゆがかかるつるものです。だしがきいてるのでカレーライスとはまた違った趣があります。そろそろとかを食べているときに、隣の席で注文されたりすると、ひとつもない敗北感に打ちひしがれます（もう一軒行くぞ…）。

### ② カツカレー

筆者は外食でカレーを注文する際は、カツカレーを注文することが多いです。通常のカレーライスではあまりにも単調すぎるし、福音漬けだけで一服しようと思ふとあまりにも貧弱なので、カツのサクサク感が加わると、カレー→カツ→カレーの順で食べることにより、食事にリズム感が生まれます。さらにカツの部分にウスター・ソースをたっぷりかけることにより、カレー→カツ（ウスターつき）→カレー（ウスターつき）と一皿で三段階の重層感溢れる味を堪能することができます。エスカロップに通じるよ

最近はインンド、スリランカ、パキスタン、タイなど各国風のカレーが食べられます。おいしいといえばおいしいのですが、これは日本人にとってのカレーとは別次元の食べ物です。各国風のものは①サラサラした汁と②パサパサの長粒種のコメから成りますが、日本のカレーは①とろみのあるルウと②粘りの強いコメから成ります。どちらのタイプも汁とコメの特性がうまく調和する相性の良い組み合わせになっています。

カレーは暑い地域で育まれた食べ物であり、北海道の気候風土に適しているとは言い難いものがあります。そういうえば、夏の方がカレーを食べたい欲求が大きいような気がします。

### ④ 創作カレー

多いですよね、変なのが。イワシとか納豆とか。もう世界が名古屋に制圧されたようなアンバランス感があります。

北海道ではスープカリーなるものが人気のようですが、これには、上記③の各国風カレーに近いもので、要するに北海道のコメは“パサパサした長粒種”に近い味ということになるのでしょうか。“カレーといえば北海道米”とおっしゃっている方もいるよ

うですが、北海道の「メ」の位置づけはそれでいいのでしょうか。

筆者の知る限りでは、これまで作る方も売る方も「シビカリ」に負けない良食味米を目指して努力を重ねて来たと思います。これは

か「セブト」とターゲットがふらつきすぎているようですね。北海道の「メ」は、もう一度ゆきひかりまで戻ってやり直してみたらいかがでしょうか。

なお、筆者が北海道で食べたカレーの中で印象深いのは、小さい（函館市宝来町）、いし川（登別市中央町）です。どちらも昔奥いのが魅力です。

## ▼おわりに

筆者はカレーが大好きです。きっと、みなさまも大好きだでしょう。でも、「ラーメン」を語りたいとするど、家で食べるインスタント「ラーメン」を除いてしまったのですが、カレーの場合、家で食べるものを評価軸の一つにしてしまいます。やはり、カレーは原体験と感情を抜きには語れません。

みなさんが予供の頃を思い出しあなた。

あなたは、近所の公園の小さな沼にザリガニを捕りに行つた帰り、友達と別れてひとりトボトボと夕暮れの道を歩いています。服は汚れ靴の中までびしょ濡れです。

“あーあ、こんなに汚しちまって、またお母さんに怒られるんだわいな”なんて考えております。  
すると、どこかの家の軒先から、カレーの匂いがふうふうと漂つてきます。

“あ、カレーの匂いだ。いいなあ。カレー食べたいなあ。今日の夕食は何だろ?な・・・。”



福神漬やラッキヨは  
苦手だ！



ごはんが赤くなっころ  
のが悲しい。

でもビンボー恵なご



とか、わけのわからぬことを  
考えながら食べこぼす。

んで東の間の回りんが生まれます。  
そういえば、一〇〇年ほど前の連續アーティクル「おしへ」の息子も、  
“団さんのつくつたライスカレーが食べたい”と書き残し、遙か  
南の戦場で無惨に死んでしまいました。渡る世間はカレーばかり、  
です。

カレーとはそんな食べ物なのです。

なんじ、鶏えると目頭が熱くなつてしまませんか？あの頃の充  
実感はいつたいどいへいつてしまつたんだ。あの頃思い描いてい  
た未来とはこんな自分になることだったのか。あの頃の夢や希望  
を自分は子供達に与えることができるのか・・・等々。カレーの  
匂いは人生郷愁自動走馬燈装置ともいうべき不思議な魔力を備え  
ております。

時は過ぎ、今では自分たちが親という立場になつております。

子供達の生活様式もずいぶんと変わりましたが、子供にとってカ  
レーの持つ効能は絶大なもので、カレーが夕食の時は、食卓を囲

**がんばれ北海道農業！**

(子供達に幸福な食卓を与えるために)

## 掲示板

### 平成十四年度

#### 地域農研農業総合研 修会開催の予告

て北海道では趨勢的な農地価格の低落が続いている、より危機的な状況に陥る前に、衆知を集めてその対応策を講ずることが急務と考えられます。そこで平成十四年度の当研究所の研修会を下記のとおり開催する計画ですでお知らせ致します。

#### 記

WTO新交渉の開始、「米政策大綱」の発表、長引く不況の影響など、北海道の農業・農村をめぐる環境は、一段と厳しさを増してきています。その中にあって、地域に於いては農業生産の担い手の高齢化と後継者不在が顕在化、生産の根幹である農地の面でも不作付けや耕作放棄の拡大が懸念されています。

また、全国の低落傾向にも増し

題に関する情報交換と討論によつて論点を整理し、現地での今後の対応の指針を得ようとす

るものです。

①開催時期 2月13日（木）  
13時～17時  
②開催場所 全日空ホテル  
③テーマ 「揺らぐ農業、

北海道の農地問題を考える」（仮題）

#### ○基調講演

早稲田大学教授

堀口健治氏

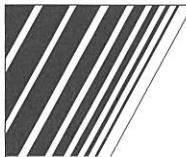
#### ○パネルディスカッション

基調講演によつて、農地をめぐらすあまあるな問題発生のメカニズムの解説と諸外国や都府県の取り組み事例から、基本的な対応方向に関する知見を得る他、パネルディスカッションでは、道内の農地問題に関する多様な取り組み事例の成果及び課題に関する情報交換と討論に

當も心配であるが、機械設備もほとんじぬべ、むかしかどいつと都会のサラリーマン風で正直のところ身体が持つかなと心配になるほど華奢な体つきである。それでも地域集落が彼らをがつちりと支えていたことが言葉の端々から伝わってきた。新規就農の大重要な要素であろう。またそれぞれが試行錯誤を繰り返しながら経験を蓄積していく過程を楽しんでいることが分かった。ハウスニアブームシが大量発生したときにテントウムシを数匹放したら、それが子供を生んで見る間にアブロムシを食べた様子を、夫婦で田を丸くして話してくださいる様子から、仕事の中に感動を持てるなんて

### 編集後記

越に新規就農した及川さんと若山さんを訪問した。お一人とも一翁規模の野菜・畑作經營で経



## *DATA FILE*

## 関連事項 / DATA

(財) 北海道農業開発公社

〒 060-0005  
札幌市中央区北 5 条西 6 丁目  
TEL 011(271)2231

## ホクレン農業協同組合連合会

〒 060-8651  
札幌市中央区北 4 条西 1 丁目 3 番地  
TEL 011(232)6108 広報宣伝課

(社) 北海道農業担い手育成センター

〒 060-0001  
札幌市中央区北 1 条西 7 丁目  
(プレスト 1・7 内)  
TEL 011(271)2255

JAようてい 蘭越支所

〒 048-1301  
磯谷郡蘭越町 104  
TEL 0136(57)5211

蘭越町

〒 048-1392  
磯谷郡蘭越町 258 番地 5  
TEL 0136(57)5111

旭川市

〒 070-8525  
旭川市 6 条 9 丁目  
TEL 066(26)1111

J A あさひかわ 旭正基幹支所

〒 078-8363  
旭川市東旭川町旭正 118  
TEL 0166(32)2231

(社) 北海道地域農業研究所

〒 060-0004  
札幌市中央区北 4 条西 7 丁目 1  
TEL 011(281)2566  
E-mail : kaihou@chiikinouken.or.jp  
HP: <http://www.chiikinouken.or.jp/>

歳と共に人間は心の動きが鈍くなる。時にテレビの別れの場面など涙が出ることはあるが、単に涙腺が緩くなってしまっていぬだけで、心からの感動はこの辺りのことがない。そう聞えればトランブルに見舞われても、ほんせりげキビキのレベルもトガつてしまふ。これもど

いつも経験から来る落着感などは、違つて、心の動きが鈍くなつてゐるせいかも知れない。感動も筋肉と同じで鍛えれば強くなるのだろうか。だとしたら、彼は百姓といへばだかひ、私は達サラワーマンにはとうに経験できない様々な仕事を通じて、多くの感動を味わえるのだ。

まじくもあい。  
経営だとか、再生産だとかや  
やこじこ話を抜きにして、家族  
が飯を食つていけ、新鮮な野  
菜を食べられて、食後に美味一  
いコーヒーが飲めればいい。お  
まけに夫婦で感動を分かち合  
れば最高の商売、農業をこいつ  
根付いてきてくることは、地域

要素になつてゐた。



稔りある大地とともに

エーコープ  
くみあい 高度化成肥料

くみあい 粒状配合 (BB) 肥料



**ホクレン肥料株式会社**

代表取締役社長 富井 淳

札幌市中央区北4条西1丁目1番地（北農ビル18F）

T E L 代表 (011) 222-2444  
F A X (011) 232-3597

**FUJI**  
**ELECTRIC**

豊かな地球社会のために

**富士電機株式会社**

北海道支社

支社長 今泉 真一

〒060-0042 札幌市中央区大通西4丁目1番地（道銀ビル）

電話（代表）011-261-7231

**POWER UP HOKKAIDO**



# 夢 大地の息吹が 大地を大きく育てます。

まだまだ夢の途中...  
そんなあなたの情熱と熱意が  
明日の北海道農業を支える力です。  
私たちは応援し続けます。



**「農地保有合理化事業」が、  
明日の北海道農業を支えます。**

「農地保有合理化事業」とは、農用地などの買入れ、売渡し、借入れ、貸付けを行うことです。

\*農用地の売渡し者が、買入れ協議によって公社へ農地を譲渡した場合、譲渡所得について1,500万円の特別控除が受けられます。

詳しい資料・ご相談は

**北海道農業開発公社**

〒060-0005 札幌市中央区北5条西6丁目1番23 農地開発センター内  
 ☎ 011(241)5601 FAX 011(271)3776